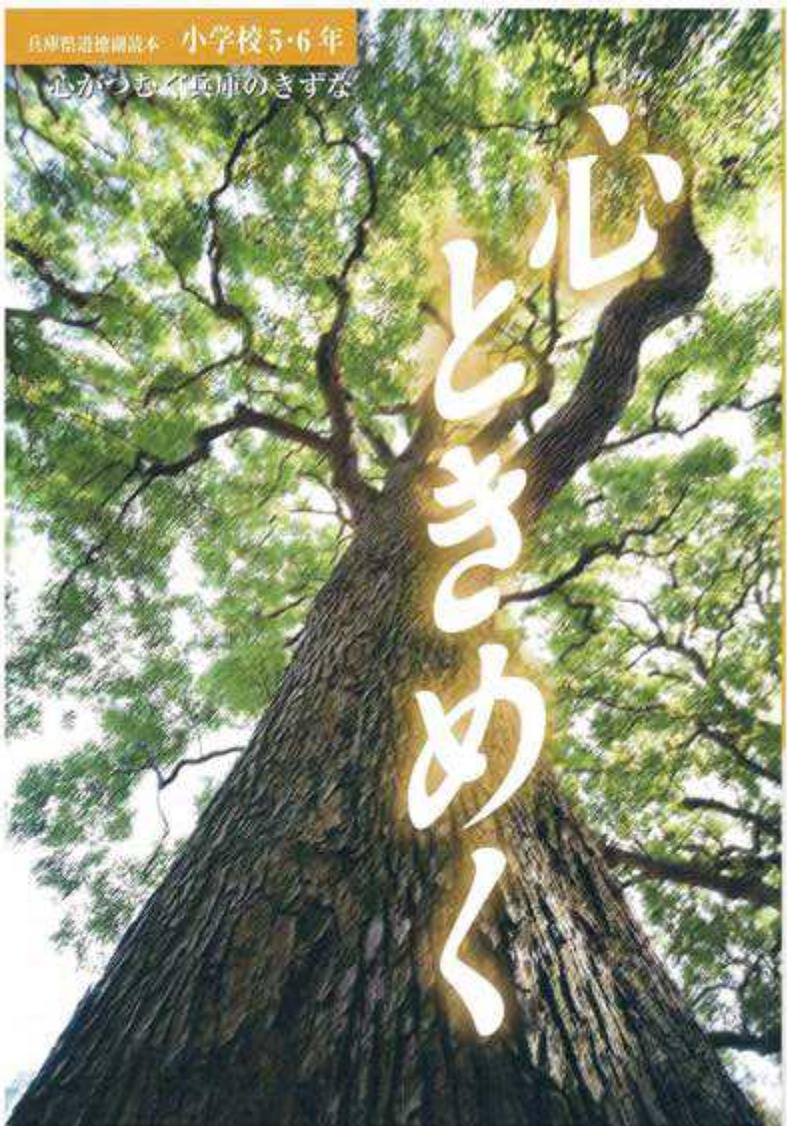


# 兵庫版道徳教育副読本

心ときめく（小学校5・6年）



兵庫県教育委員会

## 心　ときめく　目次

○「私、お医者さんになる」―横山醇―	1
○未来にのこそう　私たちの浄土寺	3
○花と水	5
○未来をつくる仕事―三島徳七―	6
○逆境からのプレーボール―村山実―	9
○お父さん	12
○ホタルが照らす里―中畑町によみがえったかがやき―	13
○負けへんで―川本幸民―	16
○おばあちゃん　風呂に入りよ	18
○日本を愛したヒコージョセフ・ヒコー	19
○最後の指揮台―朝比奈隆―	22
○函館で出会った人―工楽松右衛門―	24
○丹波市と丹波篠山市をつなぐ道―田艇吉―	28
○ともに支えあつて	31
○わが道を歩む―池田草庵―	32
○甘地の獅子舞	34
○忘れない夏―嘉藤栄吉―	36
○樽見の大桜	39
○龍馬がのこしたもの―坂本龍馬―	42

「私、お医者さんになる。」

横山醇

「私、お医者さんになる。」

夕食の最中に、とつ然醇が宣言しました。

家族はおどろいて、はしを持つ手が宙に止まり、醇を見ました。

「私、お医者になって、病気で苦しんでいる人を救うの。」

醇は、もう一度強く言って、茶わんのご飯をかきこみました。

これは、醇が密かにいっていた夢でした。

通っている女学校にある付属病院や、看護学校の様子を見て、医師になって病気に苦しむ人々を治すことができれば、と思いつけていたのです。

醇のとつ然の宣言に家族がおどろいたのも無理はありませんでした。

このころ、時代は明治の初め、日本が開国してまだそれほど時が経っていないころでした。

女性に学問など必要ないというような社会で、医師といえば男の職業と決め付けているような世の中だったので。

しかし、醇の父省三は落ち着いていました。

「よからう。女も自立するために学問することが必要じゃ。醇、やってみい。」

そう言って、醇の夢を後おししてくれました。

大阪の薬学校で学んだ後、一八九四（明治二十七年）年、醇は医師を目指し、上京して男女共学を認める医学校に進学しました。

しかし、男女共学といっても名ばかりで、学校でもあいかわらず、男子の立場が上、という古い考え方が残っていました。

授業中、教授から、女子学生は後ろで立つて聞け！と言われ、醇は三、四名の女子学生と広い教室の後方で立つたまま講義を受けました。

友達の女子学生たちは、不平不満を口にしました。

「私だってくやしいわ。でも私たち、医者になろうと決心してここに来たんじゃない。ここでくじけてはだめよ！」

醇は、仲間たちを、そう言っってはげしました。

それから、かの女たちはけん命に勉強しました。

男子に比べ不利な条件で受けた講義で書き取ったノートを持ち帰り、夜をてっして清書しながら覚えていくという日々が続きました。

醇は、「十分な条件で勉強することができなかったからだめでした」とは、絶対に言いたくはなかつたのです。

二年間の努力の末、醇は医師国家試験に合格しました。

「これでお医者さんになれる。病気で苦しんでいる人たちを助けることができる。」

医師めん許状を手にした醇は、これからの自分の未来にときめきました。

一八九七（明治三十）年、兵庫県で初めての女性の医師が誕生したのです。しかし実際に病氣の人を治すためには、まだまだ経験が足りませんでした。

醇は医者としてのうでをみがくため、再び東京に行き、実地での研修に打ちこむのです。

「女だつて立派なお医者さんになれる。」

醇はそう信じて研修にはげみました。

醇の強い決意と、そのがん張りを認めて応えんする人々の存在が、厳しい研修の日々を支えました。

東京で、当時の有名な医学の先生から子供の病氣を治す指導を受けた醇は、日本で初めての小児科の医師になりました。

研修を終えた醇は、ふるさとの龍野（現在のたつの市）にもどり、病院を開業しました。

女性が病院を開くというのは、この時代、とてもめずらしいことでした。

「だいじょうぶよ。すぐに治るからね。」

こわがる子供に優しく話しかけながらしん察する醇の評判は、少しずつ広がっていきました。

「醇先生にみてもらうだけで安心や。」

しん察を受けた母親の言葉を聞きながら、醇は子供の目を見て、ただうれしそうにほほえみかけるのです。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

## 未来の「こそう」 私たちの浄土寺

「ひとみ、いつしよに浄土寺行かへん？」

夏休みのある日、ひとみは久しぶりに東京から里帰りしている姉にさそわれた。

浄土寺というのは、ひとみが住んでいる町にあるお寺だ。このお寺が国宝だということとは聞いていたが、何がすごいのがわからない。低学年のころは、お寺の境内で友達とよく遊んだが、最近では行くこともなくなっていた。

「ええっ、急に何でや？この暑いのに。」

ひとみは面どうくさそうな顔をおなかの大きな姉に向けた。年がはなれた姉はおなかに赤ちゃんがいて、動くのも大変そうだ。

「いいからいいから。ついておいで。」

姉はなかば強引に、浄土寺へ連れて行かれた。ひとみは、「見たいテレビがあったのになあ」と思い、ほほをぶつくとふくらませていた。そして、浄土寺に続く長い階段を上がりながら言った。

「いまさら浄土寺に来て何が楽しいん？何回も来てるやん！」

すると、姉は急に立ち止まった。

ふり返ったひとみの目に入ってきたのは、ひとみをじっと見つめる姉だった。

「どうしたん？お姉ちゃん。」

ひとみは、姉がなんとなく悲しそうな顔をしているように感じた。

悪いことを言ってしまったのかと、少し気になった。

ひとみは、姉が追いつくのを階段の途中で待っていた。

「ごめんな、無理にさそって。次に小野に帰ったら、浄土寺に行こうって、東京にいるときからずっと思ってたんや。」

姉は、ひとみにそう言って、階段を上がりきったところで立ち止まり、大きく息を吸った。

ひとみはだまって、姉を見た。

「おなかの赤ちゃんにも、ふるさとのお堂を見せておきたくてな。」

「そうなのか……」とひとみはわかったような気がした。

「それに、ひとみにも見てもらいたいと思って。」

「えっ、私に？」

「何度も来たことがあるのに、なんで私を連れてきたいの……？」

ひとみは不思議に思った。そんなひとみの様子を察してか、

「いいからいいから。さ、行い。」

と言って、姉は歩き出した。

ひとみにとつても、何か久しぶりのなつかしい風景だった。

二人で並んで浄土堂に向かいながら、姉が話してくれた。

浄土寺は、建て方がとてもめずらしく、奈良の東大寺とここにしかない貴重なものであること、

鎌倉時代に建てられたこと、八百年もの長い間、火事にみまわれることもなく、建物がこわれることもなく、地域の人々の手で守られてきたこと……。

この日、姉が教えてくれた話は、知らないことばかりだった。

奈良の東大寺には、行ったことがある。あんなに有名な建物と同じだなんて、ひとみはまったく知らなかった。ひとみは、浄土寺に来ても境内で遊ぶだけで、浄土堂の中を見たこともなかった。もちろん、案内板を読んだことさえなかった。

「お堂に入ってお参りしようや。」

二人は阿弥陀三尊立像が安置されている夕日の差しこむ浄土堂に入った。

お堂に入ったひとみは、はっと息をのんだ。

この世のものとは思えない、美しく神々しい光景が広がっていた。

蘆戸から入ってくる西日が、阿弥陀様を背後から赤くかがやかせている。

天じょうもかべも夕日に染められ、ゆかは反射した光で白くなり、まるで阿弥陀様が雲の上につかんでいるようだ。

ひとみは、ただその美しさに心をうばわれていた。

「ああ、私、何も……。」

ひとみは、近くにいながら、今日初めてお堂に入った自分はずかしく思った。

自分が住んでいる町に、こんな貴重な建物と、すばらしい阿弥陀様があることを、今日の今日まで知らなかった。

ふと、となりを見ると、姉は阿弥陀様に見とれながら、大きなおなかを優しくなでていた。

「ひとみ、おなかの赤ちゃんにも、いっぱい伝えたいね。」

「うん。」

ひとみはにっこり笑って、深く何度もうなずいた。

二人が浄土堂から出ると、大きな夕日が金色に空を染めていた。

顔に当たる風もすがすがしい。ひとみは、ふり返って阿弥陀様のいるお堂を見つめた。建物すべてがかがやいて見え、なにか宝物を見つけたような気分だった。

「今度は、三人で見に来ようね。お姉ちゃん！」

姉も、にっこり笑った。

「でも……、その前に、夏休み中に友達をさそってここへ来ようかな。」

そう思いながら、ひとみは浄土堂をもつ一度ふり返った。

## 花と水

一月十七日、私が勤めている幼稚園にかけつけた時は、すでに五百人をこえるひ難者でこった返していました。その時から、私はひ難所の仕事に追われる毎日となりました。

そんなある日、

「きれいな花ですね。」

という声にふり向くと、ボランティアの人が花だんに見とれていました。それは、全国花のコンクールで最優しゅう賞をとった自まんの花だんでしたが、しん災後はまったく手入れができていませんでした。

「子どもたちにはかわいそうですが、水が無いので、今年はもつ花のなえづくりもあきらめてい  
るんですよ。」

「さみしいなあ。こんな時だからこそ、子どもたちに花が必要なのかもしれないのにね。」

その一言が、私を目覚めさせてくれました。何としても、花のなえを育てなければと思いましたが、雨が降るとバケツなどに水をためましたが、三万株以上のなえにはとても足りません。といって、給水車の大切な水は一てきたりとも使えません。川の水しかないと思いましたが、しかし、生活のための水にも不自由しているひ難者の気持ちを考えると、昼間、ひ難者の目の前で花に水をやることは、川の水といえどもできません。

そこで、真夜中になると、自動車にポリタンクを積んで芦屋川に水をくみに行きました。頭とこしにかい中電灯をつけ、二、三メートル下の川の水をロープにくくりつけたバケツでくみあげました。こうして持ち帰った水をじょうろに移しかえ、一株一株ていねいに水をやりました。多くのなえに水をやるため、何度も何度も幼稚園と芦屋川を往復し、すべてのなえに水をやり終えるころには、もう夜も明けようとしていました。

ある夜、いつものように水をやっているとき、ひ難生活をおくっている人が起きてきました。

その人は、水やりの様子をじっと見ていましたが、しばらくして、

「その水はどこからくんできたの？」

と聞いてきました。それがきっかけで二人は話をするようになり、気がつくとき、私は花への思いを熱意をこめて語っていました。

「私も手伝っていいかな。」

こうして、ひ難生活をおくっている人やボランティアの人も手伝ってくれるようになりました。寒い冬の水やりは大変つらい作業です。何度もくじけそうになりながら、みんなの支えによつて、水道が復旧するまでの二か月間、水やりを続けることができました。

春になりました。

あの三万をこえる花は、いつせいにさきそらい、登園してくる子どもたちをむかえました。ひ難生活をおくっている人々にも、心の安らぎをあたえました。

私は、水をもらった花のようにすがすがしい気持ちになりました。

## 未来をつくる仕事 三島徳七

MK鋼。

聞きなれない名前かもしれませんが、これは、飛行機が天空を飛ぶことや、自動車が行くことに大いに役立つてきた強力な磁石鋼です。

このMK鋼は、三島徳七さんという工学博士が発明しました。

三島さんは一八九三（明治二十六）年、淡路島の津名郡広石村（現在の洲本市）で喜住家の七人兄弟の末っ子として生まれました。のちに大学でお世話になった三島先生の養子になり、三島徳七となります。決してゆう福ではない家庭で育った三島さんは、小学校を卒業した後、勉強を続けるために書生となりました。三島さんは、先生のお世話や家事がどれほどいそがしくても、勉強をおこたることはありませんでした。熱心に学び、わからないところがあると、「先生、この問題は、どうしてこうなるのでしょうか。」

と質問します。あまりの質問せめに、先生がにげ出したというエピソードがあるほど、勉強に熱心でした。納得のいかないことを中と半ばで終わらせないというこの学問への姿勢が、後年、我が国の十大発明家の一人となる三島徳七さんを生んだといつてよいかもしれません。

三島さんは、書生を経て東京帝国大学に入学し学問を積みみます。卒業後も大学に教員として残り、学生に教えながら、数名の助手とともに金属に関する研究を進めました。

三島さんは、助手や学生の質問に丁寧に答えました。

「先生は、どのような時でもくり返しくり返し、私たちがわかるまで、教えてくれる。」  
学ぶ側から教える側の人間になつても、学問に対するまじめな態度は変わりませんでした。

博士となつた三島さんの研究は、様々な金属におよびました。三島さんの研究のスタイルは生活の中から金属に関する課題を見つけ、それを解決するというものでした。例えば当時、電熱線はニッケルでつくられていましたが、日本ではその資源がとぼしく、ニッケルは輸入にたよるしかない高価なものでした。そこで、何かちがう金属で電熱線ができないかと考え研究し、それを解決しました。あるいはドリルで固いものに穴を開けるために、より固い金属が必要となれば、やはりこれも研究を重ね発明していきました。三島さんの研究室からは、生活に役立つ様々な金属が誕生していったのです。

中でも大きな発明はMK鋼という磁石です。当時の磁石は同じ日本人研究者が発明したKS鋼というものが最も強力でしたが、非常に高価で、生活の中で役立つことが難しいものでした。

KS鋼よりも強力で、しかも安価でつくることができるMK鋼は、形や大きさを変えても強い磁力をもつたままなので、今日でも多くのエレクターボックス機器に用いられています。MK鋼は、私たちの便利な生活を支えてくれているのです。

それは三島さんのこのような「ひらめき」から始まりました。

「鉄もニッケルも磁石になりやすい金属なのに、この二つを混ぜたニッケル鋼は、まったく磁石にならない。これは不思議だ。まてよ、何か工夫すれば磁石の機能をもたせることができるかもしれない……。」

三島さんが目をつけたのはアルミニウムでした。これまでの金属の研究でアルミニウムもくわしく研究していた三島さんは、ニッケル鋼とアルミニウムを混合させることで、何かが起こるのではないかと考えました。

そう決まるとすぐに実験が開始されました。ニッケル鋼とアルミニウムを混ぜる割合を少しずつ変えながら合金をつくるというものです。その合金で磁石ができるのではないかといい、いわば未知へのちょう戦のような仕事でした。作業には正確な記録、ち密な技術、そしてなによりも根気が必要でした。実験が始まりました。混合の割合をわずかずつ変えながら合金をつくり、そこに磁石の性質が生じるかを調べていくのです。毎日、毎日、夜おそくまで三島さんの研究室には明かりが灯っていました。

スタートからしばらくは、でき上がった合金の性質を調べる研究室の人たちの期待は高く、活気がありました。しかし、何度も何度も同じことをくり返す作業からは、何の成果も得られず、次第に研究者たちの表情にひ労と失望の色がこくなってきます。

「まただめでした。」

三島さんに報告する助手たちのため息で、研究室の空気が重くなっていきます。

しかし、三島さんは、ニッケル鋼とアルミニウムの合金には、磁石の性質をもつ可能性があるかと確信していました。その時点では、まだ証明はできていなかったのですが、あらゆる金属の性質を知りぬいていた三島さんは、どんなに実験に失敗しても、くじけることはありませんでした。

「この研究を続けていくことで、必ず新しい何かが起こる。そのとき新しい未来が生まれる。どんなに時間がかかっても、きつと解明してみせようじゃないか！」

しずむ研究室の仲間たちを上げます三島さんの目には、何かを信じる力強さがありました。

一九三二（昭和六）年のある日、その時がやってきました。

いつものようにできあがった合金を、助手の一人がけずっていました。

毎日くり返しの作業に無表情だった助手の目が、一しゅんするどくなりました。そして再びしん重にその合金をけずりました。

こんどはその顔面が紅潮してきました。

「先生——」

助手は、大きな声で三島さんを呼びました。

「これが……。」

今けずった合金を、助手は指さしました。

三島さんは、そのけずりくずを見て、息をのみました。

助手が今けずった合金が、機械にへばりついてはなれないのです。

「なっている……。これは磁石になっている。しかも相当に強力なものだ。」

新しい磁石が誕生したしゅん間でした。

「おい！ やったじゃないか！」

三島さんは大きな声を上げて、研究室の仲間を見回しました。

長くて単調で根気のいる研究作業に取り組んできた仲間の顔がかがやきました。

この発明は、こつこつとくり返しくり返し実験した研究室の成果でした。

金属の研究に精を出して向かい合ってきた中で、三島さんの頭にふとうかんだ「ひらめき」が未来への限らない可能性を秘めた発明につながったのです。

その磁石は「MK鋼」と名付けられました。三島さんの養子先と生家の頭文字をとったものです。

まだこの時、使い道はわかりませんでした。しかし、これは未来をつくる仕事であると、三島さんは機械へばりつく合金のけずりくずの未知なる用とに、心ときめかせ思いをめぐらすのでした。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

## 逆境からのプレーボール 村山実

「こら、一朗！ 頭を下げんか！」

ベンチから飛んできたかんとくのどなり声に、ぼくは、マウンドでしゅしゅぼうしを取って、ほんの少し頭を下げた。

なん式少年野球の秋季大会準決勝戦、ぼくたちのチームが二対〇でリードした最終回、ツアウト満るいでデッドボール、おし出した。二対一。点差は一点になった。

タイムをとって内野手がぼくのところに集まってきた。

「ドンマイ、ドンマイ。」

「あと一人だ。気楽にいけよ。」

みんなは、そう言っつてぼくをほげます。

でも、ぼくは顔を上げずに、無言でマウンドの土をならし続けた。

「じよう談やない。そもそもツアアウトランナー一るいの場で、サードゴロをお前がエラーしたからピンチを招いたんやないか。あれがアウトなら試合は終わっていたやろ！」

ぼくは、気楽にいけよと声をかけてきたサードの克治に腹を立てていた。

「エラーしたお前が言っつな！」と言い返したい気分だった。

そのエラーのおかげでフォアボールを出し、そしてデッドボールで失点だ。

「あれもこれもおまえのせいや！」

ぼくは腹の中で克治にどなっていた。

イライラした気持ちは収まらず、次の打者をむかえた。ぼくの不機げんが伝わったのだろうか、それまで勝利目前で盛り上がりついていた応えんする人たちの声も小さくなっている。

ぼくは、力まかせに第一球を投げこんだ。

「あっ！」

吸いこまれていくとは、こういうことかと思つた。ボールはぼくの手元をはなれ、ストライクゾーンのと真ん中へ遠ざかっていった。カーンというすごい金属音がして、打ち返されたボールは、レフト頭上を大きくこえていった。

三るいランナーに続いて、二るいランナーもホームイン。二対三。

試合終りよう。ぼくたちのチームの逆転サヨナラ負けだ。

家に帰つたぼくは、げん関にバググとバットを投げ出した。どろにまみれたユニフォームを、着がえる気分にもならなかつた。

「おっ、一朗、もう帰つてきたんか。」

リビングからぼくを見つけて、父さんが話しかけてきた。父さんは、いつものように今日のぼくの試合に応えんに来てくれていた。もちろん、ぼくがサヨナラヒットを打たれたところも見ていたにちがいない。

ぼくは返事をせず、くつをぬいでいると中で、げん関にねそべった。  
「ちくしょう!」

はき捨てるように言ったぼくに、父さんが言った。  
「くやしいか。」

「あたりまえや!」と僕は心の中で毒づいた。

「村山実の心境というところか、天覧試合の。」

と言って、父さんは笑った。

「人の気も知らないで……。」

ぼくは笑った父さんに腹が立った。

「知つとるか?村山実。おまえの好きな阪神タイガースの元エースやで。」

「えっ?」

タイガースと言われると、ぼくは無意識に反応してしまつ。

「父さんはまだ生まれとらんかったころや。じいちゃんから聞いた話やけどな、昭和何年やったか、東京の後樂園球場で阪神対巨人の試合で村山さんは、くらつたんや。」

「よりよつて、ジャイアンツにかよ……。」

ぼくは上半身だけ起き上がった。

「その試合には天皇陛下と皇后陛下が観戦に来られたのや。天皇陛下がご覧になることを天覧いうて、すもつなんかでもあるやろ。そこで村山さんは、一発浴びたんや。今日のお前みたいなヒットやなしに、九回裏、同点でホームラン打れたんや。しかも、打ったのはあの長嶋茂雄さん。天皇陛下の前での劇的なサヨナラホームランで、そりやもつ、長嶋さんは一やく大英ゆうやで。その時、村山さん、新人の年やったんやで。」

ぼくは立ちあがり、アンダーストックキングをぬぎ、はだしになって、リビングに入った。

「そりや、村山さん、ショックやったろつよ。くやしくてくやしくて、きつと、今日のお前と同じようにな。」

自分のことには取り合わず、ぼくは、父さんに聞いた。

「それで村山さん、どうした?」

「どうしたもこうしたもないわ。そこで野球をやめるわけにいかんやろ。じいちゃんが言つとつたが、そこから村山さんは奮起したんや。その年十八勝をあげて、阪神のエースになった。くさつてばかりおられん、きつとくやしさをバネにしたんやろな。」

ぼくはだまって聞いていた。

「さつき、お前そこでぶてくされとつたやろ、くやしくて。でも、そのくやしさはだれに向けたもんやつた?」

「ここであるのかよ……。」

ぼくはだまっていた。

「フォアボールもデッドボールも、みんなのせいにしとつたんやないんか?」

父さんはお見通しだった。コップの水をこくりと飲んで、父さんは話し続けた。

「父さんはな、子供のころ、よくじいちゃんから村山さんの話を聞いてたんや。じいちゃんは、熱きよ的な村山ファンやったんや。」

話がぼくから村山さんにもどつてくれたので、少しほっとしたが、さっきまでねころがってぶてくされていた自分を少し反省していた。

「とにかく、村山さんは負けず嫌いだな、自分がストライクだと思った投球をボールだと判定されると、泣いて主しんにくってかかった。退場を宣告されて、ベンチにもどつても納得がいかず、チームメイトのかたに顔をつけて泣き続けたという話もあるくらいや。」

「負けすぎらひは似ているけど、ぼくには、そこまでの根性はないな。」と思った。

「でもな、おもしろい話があつてな。長嶋さんにサヨナラホームランを打たれたのが、カウント2エンド2からの五球目やったんや。村山さんはインコース低めのシュートで少しゆさぶつて、2エンド3にして六球目で勝負のつもりやった。そして五球目、思い切りインコースに投げこんだのが、高めにういたんや。それを、ガツンと打たれた。数日後、天覧試合の翌日に長嶋さんと王貞治さんが対談した記事を読んで、村山さんはがく然とする。」

ぼくは父さんの話に聞き入っていた。

「サヨナラホームランについて話している途中で、長嶋さんが『ところでワンちゃん、あれカウントいくつだったっけ？』って聞いたんやつて。王さんがあわてて『2...2ですよ。』と言つ。

長嶋さんは『ああ、そうだったっけ。』ときた。村山さんはうなった。自分はカウントを重視して勝負にいったのに、相手はそんなことおかまいなした。それを知つて村山さんは、あつさりだつぼうする。『かなわんな、長嶋さんには。』と、このあたりがえらいと思うんや。こういうけんきよさがあるから、あのホームランを打たれたことをバネにできたんやろな。」

そこで、父さんはまた水をこくりと飲んで、言った。

「最大の失敗は、最大の幸運へのプレーボールである。」

「なに、それ？」

「村山さんが、本に書いとるんや。なんていうんかな、失敗してくさつとつたら、先へ進めへんということやろな。父さんはそう思つて、この言葉を大事にしとるんや。」

ぼくは、さっきの試合について考えていた。父さんは話し続けた。

「調子のいい時は、目の前にたくさんの方がいて、手をさしのべて引つ張つていつてくれるように感じる。ところがな、逆境におちいると、そういう人がだれもおらんようになってしまつて、村山さんは感じて腹を立てたそうや。ところが、時間がたつて考えると、自分の後ろにいて支えてくれる人が、たくさんおつたことに気づいた。目に見える人だけが、自分を支えてくれているんやないって気づく。試合でカッパしても、どこかで自分を冷静に見つめることができたから、あんな小さな体でエースになれたんやろな。さすがやで、村山さんは。」

ぼくは、今日の自分自身を思い返して、下を向いた。

「でもな一朗、失敗にくさらず前へ進んでいった村山さんは、えらいな。」

ぼくは、顔を上げて父さんの顔を見た。父さんは、にっこり笑つた。

## お父さん

地しんのすぐ後に、学校の運動場にひ難しました。

「おばあちゃんの家を見に行こう。」

と、お父さんが言い、二人で走り出しました。板宿を過ぎてから、もう走れなくなりました。屋根のかわらが落ちていたり、たおれてきそうな家もたくさんありました。おばあちゃんは、お母さんのお姉さんと二人ぐらだったので、余計に心配になりました。けむりくさいにおいもだんだん強くなってきました。

もうすぐで、おばあちゃんの家という所で、ぺっちゃんこの家がありました。そこのおばあさんが泣きながら、

「むすめを助けてください。お願いします。」

とさげんでしました。わたしは、通り過ぎようと思いました。すると、お父さんが、

「これ持つといて。」

と、ひとこと言ってから、わたしにジャンパーを投げて、ぺっちゃんこになった山みたいな家を登って行きました。わたしは、ふさがった道の真ん中につっ立っていました。

「おばあちゃんたちが、死んでたらどうしよう。死なないですよ。お願い。」と思いながらも、どこかで「知らない人なんかより、おばあちゃんたちを助けてよ。」と思っていました。すると、なみだが急にぼろぼろと出てきました。いつもだったらすぐになみだをふくの、人にじろじろ見られていても全然気になりませんでした。

「見つかったぞ。」

という知らないおじさんの声で、なぜかうれしくなりました。お父さんが出てきたので、うれしくてほっとしました。

すぐにおばあちゃんの家に行きました。おばあちゃんの家を見ると、屋根が下がっていたので、家にはもういないと思います。千歳小学校へ走りました。体育館の中をさがしたけどいませんでした。すごく心配なので、もう一度、おばあちゃんの家を見ることにしました。すると、おばあちゃんとおばあちゃんが、家の中にいました。げん闘もつぶれていたの、お父さんが格子戸の板をのけました。出てきてほっとしました。

今回の地しんで、お父さんのやさしさ、たくましさを感じました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。

本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

## ホタルが照らす里 中畑町によみがえったかがやき

それは、おとぎの国の出来事のようにでした。夜のとぼりがおりるころ、辺り一面に、ほのかな光がうかび上がってきました。一つ二つ、三つ四つと、その光が糸を引くようにゆれ動きまわります。暗くなった空に星がかがやき始めるころ、地上のその光の数も次第に増えてきました。

やみの中でやわらかい光が作り出す自然のショーを、たくさんの方が見守っていました。

今日は「中畑町ふるさとホタルまつり」の日です。台風の影響から立ち直り、昔のようにホタルが飛び交う自然豊かなふるさとにもどることを願って始まったこの祭りは、地域の復興のために力を合わせてきた人々の記念日でもありました。大勢の人の中に藤原さんの姿がありました。藤原さんは、ホタルの光に照らされた人々の笑顔をしながら、あの大雨の日からの出来事を、思い出してしていました。

中畑町をこぎ雨がおそったのは、一九八三（昭和五十八）年九月のことでした。

台風十号のえいきょうで三日間激しい雨が降り続けました。すさまじい勢いで雨は降り、川の水かさがかげまでも経験したこともないほどに増してきました。山の谷間に白い筋が見え始めたと思った次のしゅん間、一気に水がおしよせ、家は水につかり、橋は川の流れにすみましました。

一面が海のようになり、町は水ぼつてしまったかのようでした。

台風が去り、晴れわたった空の下には、茶の間に土砂が入り河原のようになってしまった家や、ひび割れた道路、深くえぐられ、大きな岩が残されたままになっている田畑を、かたを落として見つめる人たちがいました。

のどかだった町の風景が一変してしまいました。

ホタルが飛び交っていたきれいな畑谷川も、無残な姿に変わりました。だれもがこの先、ホタルを再び見ることはないだろうと思いました。いや、ホタルのことなど考えている余裕はありませんでした。なにしろ人々の生活のきよ点である家々と田畑が、大きな被害を受けたのです。自分たちの生活がどうなるのか、破かいされた家や道路、田畑をこれからどうすればよいのか、町の人たちは不安に包まれ、ただぼう然とするばかりでした。

当時、町の役員たちはどのようにしたらこの大被害から町を立ち直らせることができるのか、そこに住んでいる自分たちに何ができるのかといったことを、何度も何度も話し合いました。この検討会に藤原さんも参加していました。

話し合いが始まってしばらくして、市役所から、被害を受けた田畑や川の修復と同時に、くずれた山すそを整備して工場公園をつくり、工場を建てたらどうかという提案がありました。この町の役員たちは、この提案について話し合いました。

工場公園の建設委員長になった井上さんをはじめ、区長さんや町役員たちは、説明会や相談があるたびに、安全で公害を出さない工場にきてもらうことが第一だと、市にお願いしました。

やがて川や田畑が整備されました。曲がりくねっていたあぜ道がまっすぐになり、細かく分かれていた田畑は広く区画され、ひとまとまりに生まれ変わりました。また、田畑へ水を引くため

の水路も、水害にあってもくずれないように整備されました。

しかし、新しい川や水路は、ほとんどがコンクリートで固められた姿に変わっていました。

「田や畑が広くなって、米や野菜が作りやすくなり、川も安全になったのはうれしいが、何かもの足りないように思うのは、私だけだろうか……。」

藤原さんは、どうしても昔の自然豊かな中畑町を忘れることができませんでした。

ある日、このことを思い切って町の役員会で話してみました。

すると、みんなだまっとうなずきました。藤原さんと同じ考えをもっていたのです。

それどころか、すでに行動を起こしている人がいたのです。

井上さんでした。井上さんは、以前から大根や玉ねぎなどの具がいっぱい入ったみそしるをつくって布ぶくろに入れ、それをコンクリートにおおわれた川に少しずつつけていたのです。藤原さんは納得しました。それは、ホタルが育つためになくはならないカワニナのエサなのです。井上さんはホタルが飛び交う日を夢見て、ずっとその作業を続けていたのです。井上さんの思いをよく知っていた山本さんが、藤原さんにそのことを話してくれました。

「藤原さんは勇気がわいてきました。」

「ホタルを呼びもとそうや。わしらの力で。わしらの生活だけじゃなく、ホタルが暮らすことのできる自然をこの町に取りもとそうやないか。」

藤原さんは呼びかけました。

「そや！水害でしずんだ気持ち、ホタルの光で明るく照らそうや。」  
と、みんなが賛成しました。

それから役員の人たちは、ホタルをもう一度中畑の町に飛ばそうと、さまざまな活動を始めました。ホタルを大切に育てている地域に見学に出かけて参考にしたり、育て方を学んだり、自分たちで幼虫の飼育に取り組んだりしました。そして、工場公園の水路や畑谷川に、育てたホタルの幼虫やカワニナを放流しました。

同時に、町にやってきた工場には、よごれた水を流さないことや、美しい自然を守る活動に協力してもらえるようお願いをしました。

そのような活動が始まってから数年が経った、五月終わりのある日の夕方でした。田植えが終わった田の水の見回りに出かけた井上さんは、工場公園の水路の近くで、黄色くかがやく光を見つけたのです。

「あっ！」

井上さんは、そのまま藤原さんの家にとんでいきました。

「おっただ、おっただ、ホタルが飛んどうで。」

興奮した井上さんの言葉を聞くやいなや、藤原さんは家をとび出しました。

山本さんたちもやってきました。

確かに黄色い光が、わずかながらゆらゆらと水面にゆれていました。

藤原さんたちは、その光を目で追いながら、こみ上げてくる思いに、言葉が出ませんでした。

このホタルの再来は、藤原さんたち役員だけではなく、町の人たちを元気づけました。昔のようにホタルが町にもどってきたのです。これをきっかけに、美しい自然と人々のつながりを大切

にしよう、という思いをこめた「ふるさとホタルまつり」を開くことを決めました。市や工場にも協力してもらい、一九八九（平成元）年、あのここの雨から、六年が経った六月に、第一回の「ふるさとホタルまつり」が開きいされました。

藤原さんたちをはじめ、ホタルが生きていくことができる自然を取りもどすために努力した人々や、それに協力してくれた町の人たちの笑顔があふれていました。

「これからもこの町の美しい自然を大事にしていこう。」  
と、この日、みんなでちかい合っただのです。

あれから二十年以上のさい月が流れました。今日の「ふるさとホタルまつり」にも子供たちの元気な声がひびいています。

「この子たちが大人になっても……。」

藤原さんは、一つ、また一つ、糸を引いてゆれるやわらかな光をながめていました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

## 負けへんで 川本幸民

テレビのクイズ番組を家族で見ているとき、「次はビールが日本にやってきたころの問題です」と出題者が切りだしたので、「しめた」と思った。つい最近、日本のビール誕生の秘話を知ったばかりだったからだ。ここは一発正解を出して、家族に自まんしてやるうと身を乗り出した。しかし、問題は「明治初期にビールはどこで売られていたか」というものだった。私は知らなかった。正解は薬局である。ビールに含まれるアミノ酸やビタミン、ミネラルがじ養強そうによいとして薬のあつかいだったそうだ。

ひろうしそこなつた私の知識は、日本で初めてビールをつくった人と、そのいきさつだった。時代の先く者とも呼ばれたその人の名は川本幸民。三田藩の藩医の三男として一八一〇（文化七）年に生まれ、藩主にその才能を見出され、緒方洪庵などと共に学んだ蘭学者である。

黒船が浦賀にやってきてからというものの、日本中はただただ西洋の進歩とそのすさまじさにおどろき、幕府も町人もおそれ入ってばかりだった。しかし、早くから蘭学を学んでいた幸民はちがった。

幸民が西洋の書物をほん訳し、自らの知識を生かしながら試作・実験したものは数知れない。銀板写真機、マツチ、電信機、白砂糖精製法、近代的塩田開発、色ガラス、蒸気船、鉄の船、そして飛行機など、当時の日本人が、とても我々につくるのは無理だと考えていた西洋の代物を、次から次へと研究していった。

さらに幸民は西洋の文明から新しい言葉を考え出している。「化学」「午前・午後」「水蒸気」「大気」「気象」といった、今では私たちがふつうに使っている言葉も、かれが考案したという。

この幸民のすさまじいばかりの研究熱は、かれの知的好奇心ばかりによるものではない。それは、三田藩始まって以来のしゅう才といわれたかれを見出し、学費をえん助し、江戸に送り出して学問をさせた藩主九鬼隆国の恩に対する深い感謝の思いの表れでもあった。兄の死で川本家をつぐために、江戸での学問をあきらめ、故郷に帰ろうとする幸民に隆国は言った。

「家のことは心配するな。余が後ろだてをする。その方は、学問にはげめ。西洋の学問はおそろしいほどに進んでいる。自分の出世や栄達のためではなく、この国のために学問にかん然といじめ。」

幸民には、この隆国の言葉に報いようという強い決意があった。さらにその決意は、日本人の一人として「西洋に負けるものか」という幸民の思いに火をつけた。

幸民はてっ底的に研究し、実績を残した。かれの業績は広く世に知られるようになった。実学の功績が認められて、一八五九（安政六）年に西洋の兵法や技術を研究するために幕府が設けた「蕃書調所」の教授になった。幸民はそこでもいっそう研究にはげみ、数多くの洋書をほん訳し、西洋の最新の学問や技術を次々としょうかいした。かれは蘭学者として日本の第一人者になっていった。

しかし、日本でビールを初めてつくったのが幸民だということを、私は知らなかった。そのいきさつが、いかにもかれらしい。

ペリーが、幕臣との会談で日本にはない飲み物をふるまったことを耳にした幸民は、「よし、自分もつくってやろう!」  
と思い立ったのである。

自分が飲みたいわけではなかった。黒船のうわさが出るたびに、「所せん、西洋にはかなわな」と、人々が口にするのを歯がゆく思っていた幸民である。ペリーだ、黒船だと聞くと、燃えるものがあつた。

黒船が去ってから、幸民はドイツの本を取り寄せ、研究し実験を繰り返した。十分な用具などあるはずもなかったが、自分の庭に炉を築き、そろわない材料は、知人に用意してもらったり、代用品をつくったりした。

苦心してつくり上げた念願のビールは、こいこはく色をしていた。そのビールを、西洋に追いついたという思いで幸民は味わつた。

よほどこのビールづくりに、日本人を悲觀的にさせた黒船に対する対こ意識があつたのだろう。派手なふるまいが苦手で、人付き合いも苦手な幸民が、

「盛大に試飲会をやろう!」  
と言い出した。そして、呼べる限りの蘭学者の仲間などを浅草曹源寺に招き、盛大な試飲会を開き、かれのつくつたビールをふるまつた。

ビール完成のうわさは、あつという間に世間に広まつた。幸民は、ゆ快地ビールの話をしていく江戸の人々の様子を、いつになくやさしい目で見つめた。

日本でもビールをつくることができるという情報は人々のはげみになった。飲むことができないくても、多くの人たちに勇気をあたえたのはまちがいない。こつして日本人が自信をもつことこそ、幸民が望んでいたことだろう。

洋学の研究で時代の先く者となり、数え切れないほどの業績を残してきた幸民だが、このビールづくりにこそ、かれの思いの原点があるように思う。

幸民自身が西洋技術を研究して製作した銀板写真機でさつえいしたかれのしょう像がある。眼光するどく負けん気の強さがにじみ出ている。

日本が鎖国から開国に歩を進めようとしていたあのころ、かれと同じように、「西洋に負けてなるものか!」

と、新しい時代にいどんだ多くの人々がいた。  
その熱い思いのかたまりが、その後の日本の発展の原動力になったのだと、そう思った。

## おばあちゃん 風呂に入りよ

ぼくの家は、市営住宅の十一階です。地しんの日から、半月以上断水が続きました。毎日、何度も何度も、給水車まで水をくみにいかなければなりませんでした。とてもしんどい仕事でした。水をくみ始めてまもなく、ぼくは、あまり会うことがなかったとなりのおばあさんを、何度も見かけるようになりました。おばあさんは足を引きずりながら、小さなやかんを持って来ました。足が悪くなっていたらしく、小さなやかんも大変な様子でした。ぼくは、「足が悪いのに、つらいやろうな。」と思いながら、「水をくんできましょうか。」の一言が、なかなか出ませんでした。

ある日の夕方、近所のおばさんが、となりのおばあさんのために水くみをしているすがたを見て、「自分も大変なのにすごいなあ。」と思い、家に帰って、母にこのことを言いつつ、助け合つのは当たり前やろ。何で手伝ってこなかったんや。」とおこられてしまいました。

それから何日かして、いつものように水くみのために下へおりていくと、となりのおばあさんも小さなバケツを持っておりてきました。母が、おばあさんを見かけて、

「お風呂に入ってる？」

と聞くと、おばあさんは、

「ずっと入ってないわ。だから、体が気持ち悪くて。」

と答えました。それを聞いた母は、

「風呂に水をはってあげるから。わかして入りよ。」

と言いました。

「風呂いっぱいの水は大変やから、いいよ、いいよ。」

とおばあさんはことわりしましたが、顔がとてもうれしそうでした。母とはよく口げんかをする、その時は、母を尊敬しました。ぼくは、家の水くみでつかれていましたが、

「ぼくもくむわ。」

と母に言いつつ、

「当たり前やろ。早うポリ容器持つといで。」

と言われました。

二十リットルのポリ容器で、風呂をいっぱいするのは大変でした。母といっしょにがんばっている、弟や近所のおばさんたちも、バケツを持ってきて手伝ってくれました。風呂に水を入れるたびに、おばあさんは

「ありがとつ。ありがとつ。」

とくり返し言いました。それを聞くと、

「もつとがんばるぞ。」という気になりました。

よく朝、おばあさんが家に来ました。

「きのうは、久々にお風呂に入れて、とても気持ちよかった。本当にありがとつさんでした。」と、声をつまらせながら、何回も何回も頭を下げて帰って行きました。その時、心の底からうれしさがこみあげてきました。

## 日本を愛したヒコ ジョセフ・ヒコ

この物語の主人公は浜田彦蔵といえます。

瀬戸内海に面した播磨国加古郡古宮（現在の播磨町）の農家に一八三七（天保八）年に生まれました。幼いころに父を、十三才の時に母を亡くしました。

母が死んだその年の秋、彦蔵は栄力丸という船に乗り江戸に向かっていました。ところが江戸からの帰路、紀伊半島の大崎のおきであらしにあって船は難破、五十二日もの間、ひょう流したのです。幸い、南鳥島の近くでアメリカの商船オークランド号に救助されました。そして、助けられた船員とともに、彦蔵はサンフランシスコへ向かったのです。

彦蔵がアメリカに着いたのは、ペリーの黒船が浦賀おきに姿を現す前々年の一八五一（嘉永四）年。日本は世界の国々から開国をせまられていました。しかし、鎖国は続き、キリスト教も厳しく禁止している状況ようでした。外国へ行くことも許されず、ひょう流して外国からもどつた者は厳しく取り調べられ、かん視されるといふ世の中でした。まだまだ、世界からはこ立した島国だったのです。

彦蔵はとう着したサンフランシスコで、日本では考えもおよばないような文明の進歩を目の当たりにします。

「これは、わいらの国とはえらいちがいや。」

レンガ造りのがんじょうな建物、たくさんの商品が並ぶ店、町を歩く人々の姿、なにもかもが彦蔵にとっておどろきで、まるでりゅう宮城に連れてこられたような気分でした。

翌年、彦蔵にアメリカのはからいで日本に帰る機会が訪れ、香港まで船で向かいました。ペリーの黒船に乗って日本に帰国する予定だったのです。ところが、その船がなかなかやってきません。そのうち、自分がアメリカに、日本との外交しようの材料に使われるのではないかという疑念をいだきます。彦蔵は帰国を取りやめ、アメリカに引き返したのでした。

再びサンフランシスコで暮らしていた彦蔵は、ニューヨークに移り住みます。一八五三（嘉永六）年、日本人として初めてアメリカ大統領に面会しました。翌年、知り合った人々の好意でボルティモアのミッション・スクールに入学し、教育を受けます。その後、キリスト教の洗礼を受け、ジョセフ・ヒコと名前を改めました。

一八五八（安政五）年、アメリカと日本との間で修好通商条約が結ばれました。日本とアメリカとの関係を知ったヒコは、日本へ帰りたいという思いが再びわき上がってきました。

しかし、キリスト教徒となった自分が、キリスト教を禁じている日本へもどることなどできないということとは、だれよりもかれ自身が知っていました。ヒコはアメリカ国民となって生きる道を選び、帰化しました。ジョセフ・ヒコ、二十才のときでした。

とはいっても、日本が自分の故国であることに変わりはありません。望郷への思いは、それからもつるばかりでした。アメリカ人となり、ジョセフ・ヒコと名前が変わっても「日本人の心」が消え失せることなど、ありはしませんでした。

そのヒコに思いがけない知らせが入ります。日本に派けんされている公使ハリスが、ヒコを神奈川領事館の通訳として採用するというのです。ヒコは長崎を経由して神奈川にふ任しました。九年ぶりに故国の土をふんだのです。

しかし、久しぶりに見た日本の社会にヒコはおどろきました。

「外国の進歩に比べて、これはなんや。この国は世界から取り残されてしまっぞ。」

開国とは名ばかりで、人々の暮らしは以前のままでした。そればかりか、外国人に対する暴行がひんばんに起きています。外国人を見たら殺害しようとする者も、たくさんいました。アメリカ人となり領事館で働くヒコも他人事ではありません。我が身に危害が加えられる可能性があります。身の危険を感じながら、日本を案ずる日が続きました。しかし、世は幕末の尊王攘夷の機運が高まる中、いよいよ身に危険がせまり、ヒコは日本をはなれる決心をします。

「きつとまた、ここにもどってくる……。」

アメリカ国民のヒコにとって日本は異国でした。しかし、次第に小さくなる日本の岸を船上から見つめ、「この国をなんとかしなくてはならない……。」という、あせりにも似た強い思いが胸のおくからつき上げてくるのを、ヒコはおさえることができませんでした。

アメリカにもどったヒコは、あの日本のなげかわしい状きょうが脳裏からはなれません。このままでは、日本は世界からどんどん見放されていく。戦争でも仕かけられたら大変なことになるだろう。人も国も、日本のすべてが目覚めなくてはいけない。そう思うヒコでした。

帰国の翌年、ヒコはリンカーン大統領と会見する機会にめぐまれました。日本では、しよ民が將軍と面会することなど考えられません。

すでにヒコが会った大統領は、リンカーンで三人目でした。

ことあるごとに日本とのちがいを思い知らされるヒコは、考えました。

「どうすれば日本は生まれ変わるだろうか。何が、日本を変えるきっかけになるのだろうか。アメリカにいても、やはりヒコは、故国日本の行く末に大きな不安をいだき続けていたのです。そんなある日、町で新聞売りを見かけました。

ヒコは早速その新聞を一部買い求め、読んでみました。リンカーン大統領の演説も記事になっています。人々はそれを食い入るようにして読んでいます。

「これだー。」

それは、だれもが世の中の出来事を知ることができる社会の光景でした。これこそが日本を目覚めさせる「何か」ではないか。

ヒコは、ひらめき、しばらくの間、新聞を読みふける人々の姿に見入っていました。

リンカーンに会ったその年、再び日本へ行く機会がやってきました。ヒコは、今度こそ故国の役に立つことをしようと、強く心に決め、再び領事館にふ任しました。

しかし、ヒコが目にした日本では、イギリス人が殺害されたり、外国の商船がほうげきされたりと、相変わらず混乱が続いていました。以前と同じように、自分の身が危険にさらされること

もたびたびありました、しかし、今度は簡単にアメリカにもどるわけにはいきません。ヒコには心に秘めたある決意があったからです。

「アメリカの出来事や、世界の動きを正確に日本の人たちに伝えなければ、この国はだめになっ  
てしまう。伝えることができるのは、異国で暮らしてきた私しかない。」

その思いを胸にいただいていたヒコは、一年後、領事館通訳を辞め、外国人居留地でアメリカやイギリスのニュースを記事にした新聞の発行に向けて活動を始めました。

しかし、アメリカで教育を受けたヒコは、日本語を話すことができても、日本語の文章を書くことが苦手でした。どうしたらよいかと思索しているところへ、ヒコが語る言葉を文章にするという協力者が現れました。ヒコのもとで英語を学んでいた岸田吟香たちです。ヒコは、岸田らの協力を得て、外国新聞をほん訳する「海外新聞」を創刊しました。

「これで、日本人は異国の出来事を知り、そして、きっと目覚めるはずだ。」

ヒコはでき上がった新聞を、感じが深く見つめていました。

一八六四（元治元）年六月。ヒコが手にしたその新聞は、定期的に発行された日本最初の新聞でした。

最初のこう読者はたったの四人でした。それでもヒコは、海外のニュースやめずらしい出来事を記事にして無料で配りました。「海外新聞」は筆写され、たくさんの人たちの手にわたるようにもなりました。ヒコは、新聞の発行が人々の考え方にいきよをおよぼす手応えを感じていました。これは、世の中を変える大きなきっかけになると、改めて強く感じました。「きっと、日本は変わるにちがいない。」

新聞を読む人たちの姿が、アメリカの街角で見たあの日の光景と重なり、ヒコの全身に熱いものがこみ上げてくるのでした。

一八六八年、ヒコは十八年ぶりに故郷の播磨にもどりました。明治元年のことでした。

ヒコはその後も日本に残り、アメリカでの経験を生かして、新しい社会づくりにこつけんする仕事を続けました。

だれよりも「日本人の心」をもち続けたアメリカ人、ジョセフ・ヒコは、一八九七（明治三十）年、東京の自宅で亡くなりました。

今は、東京青山の外国人墓地で永いねむりについています。

## 最後の指揮台 朝比奈隆

「おそらく、これが先生の最後の演奏になる。そのつもりで、気合い入れてや。」

マネージャーが、前半の演奏を終えて後半を待つ楽屋で、しばらく出するような声で言いました。楽器の手入れをしていた楽団員たちの手が、止まりました。

ほんのわずかですが、楽屋が静かになりました。

「また、しよう談やる。」

「そんなわけないやん。」

マネージャーの言葉を否定しようという声があちこちで上がりました。その一方で、楽団員たちには、「いつか、こういう時がくる」という、覚悟のようなものがあつたようです。みな厳しい表情をしていました。

二〇〇一（平成十三）年十月二十四日、愛知県芸術劇場コンサートホール。

この日、私がコンサートマスターを務める大阪フィルハーモニー交響楽団は、九十三才になる朝比奈隆先生の指揮でチャイコフスキープログラムの演奏会に臨んでいました。大阪フィルは、朝比奈先生が五十年以上もの長い年月をかけて育て上げてきた交響楽団です。

朝比奈先生は九十才を過ぎても精力的に指揮活動が続けていましたが、その年は九月の初めごろから体調がすぐれず、ファンの方々も私たち楽団員も心配していました。

その日前半の演奏が始まる時、楽屋からぶ台のそでまで先生は車いすで移動しました。

「先生、私がかたをお貸ししますよ。」

と、マネージャーが声をかけると、

「自分で歩くよ。」

と言つて、長身の朝比奈先生は、一歩一歩ゆっくりと指揮台に向かって行きました。

そこは、先生が自分の生がいをかけた仕事場なのです。

前半の「ピアノ協奏曲第一番」の演奏が終わり、自分の楽屋にもどった朝比奈先生は、横になつて休みました。

「後半が先生の最後の演奏になるかもしれない……」と、楽団員の楽屋に重苦しい空気がただよっていたのは、ちょうどそのころでした。

後半の演奏になりました。左手をふ面台について長身の体を支えた朝比奈先生が、右手の指揮棒を静かにふり下ろすと、クラリネットが奏でる重厚なメロディーとともに「交響曲第五番」が始まりました。指揮棒の動きからは、この曲と、作曲者であるチャイコフスキーへの朝比奈先生の熱い思いが、私たち演奏者にも強く伝わってきました。

「よし、ふ面通りだ。」

これが朝比奈先生の口ぐせでした。

「作曲者が指示した通りに演奏する、というのが先生の主義だったのです。」

「だめだ、だめだ。もう一度。」

と言われた時は、ふ面通りに演奏ができていないということですよ。」

「作曲家の魂と対話することを大切にしない。」

朝比奈先生は、いつもそう言い続けました。私たちは、先生といっしょに、作曲家の思いえがいた通りに曲が仕上がるまで、何度も何度も厳しい練習をくり返したものです。

先生は、何百回となく演奏した曲であっても、演奏のつど、真新しいスコアを用意し、練習で気づいたことや、楽団員に指示したことを書きこんでいました。九十才を過ぎても、先生はこのことを自分自身に課していました。

私は、よく言ったものです。

「先生、このスコアに書かれたことは、前に演奏した時のものとほとんど同じですよ。」  
すると先生は、

「ははは、毎回同じでも、それが新しい発見なんだよ。作曲家の偉大さがわかるんだよ。」  
と言って笑うのでした。

後半の演奏が進むにつれ、朝比奈先生の体は限界に近づいてきているように見えました。しかし、指揮棒をふるその手は、まるでチャイコフスキーの魂と語り合っているかのようでした。演奏している私たちにも、その思いが伝わってきました。

最後の和音が鳴り終わらないうちに、会場は万らいはく手に包まれました。

朝比奈先生は、しばらくふ面台にもたれかかっていた私には、先生その姿がなみだでかすんでいます。指揮台を降りようとする先生に、私は思わずかけ寄り、そして、耳元にささやきました。

「先生、もういいですよ。もう終わったんです。」

「立つことが私の仕事だ。」

「座って指揮をするようになったら、私は引退する。」

練習であっても、もちろん本番であっても、先生は決して指揮台にイスを置きませんでした。

観客のわれんばかりのはく手に、背筋をぴんとのばし、笑顔で応える朝比奈先生。

「これなのだ……。」

私は先生の、そのまっすぐな背中を見つめました。

## 函館で出会った人 工楽松右衛門

「函館が五月の連休のところで、小樽はまだまだそのあとだ。」

雄太が北海道を遠いところだと思ったのは、幼いころにおじさんから聞いたその一言がえいきようしている。神戸では三月の末か四月の初めに満開になる桜の話だった。

雄太は六年生だ。三年ぶりに、今年一年生になった妹の和奏子とお母さんの三人で、お母さんの実家のある小樽で夏休みを過ごした。雄太たちは、神戸にもどる前に函館で一ぱくすることになった。お母さんの弟であるおじさんが函館に単身ふ任しているからだ。三人は、おじさんのアパートにとまった。夜、おじさんが言った。

「雄太、函館は初めてだろ。明日少し見物していけよ。観光タクシーを呼んであげよう。お前、小樽や札幌しか知らんだろ。北海道には、もっともっといろんな所がある。ちょうどいい。留守番しとる父さんにも、いいみやげ話になるぞ。」

翌朝、タクシーがおじさんのアパートまでむかえに来てくれた。

「ぼく、前に乗る。」

雄太は、運転手さんのとなりに座った。雄太は座席の前にはってある「乗務員証」で、運転手さんが「磯部一雄」という名前だと知った。「雄」の一文字が自分と同じだと思つと親近感がわいた。「この人を磯辺さんと呼ぼう」と思った。その磯部さんが聞いてきた。

「どちらからですか。」

「神戸です！」

和奏子が、後部座席から大きな声で言った。雄太は、ふり向いて妹をにらんだ。

「神戸、兵庫ですね。私ら函館の間は、兵庫に足を向けてねることができないんですよ。」

「えっ、なんで。」

雄太は磯部さんの横顔に、思わず聞き返した。

「いやあ、兵庫の人に対して本当に感謝しているということですよ。」

雄太は、春の遠足のことを思い出した。淡路島に行つて、函館のはん米につくした人の資料館を見学したのだ。「その人のことにちがいない」と思った。しかし、名前が思い出せない。

「函館の港をつくった人でしょ。淡路の人。」

と、雄太は自信ありげに磯部さんに言った。

「ははあ、高田屋嘉兵衛ですね。」

と、磯部さんは反応してくれた。

「そつや、高田屋嘉兵衛だ。」

雄太は名前を思い出し、いい気分になった。

「でもね、ぼく、それだけじゃ、半分なんだよ。」

「えっ、半分？」

雄太は少しあわてた。せっかくお母さんにいいところを見せたと思ったのに、半分だと言われ、後ろの気配をうかがった。お母さんは和奏子と町の景色を見ながら話に夢中になっていた。

「まず、函館山に登ってみましょう。そこからはその港がよく見える。きれいですよ。」  
「そうやって磯部さんはハンドルを切った。」

名前を思い出せなかったのは不覚だったが、雄太は、さっきの「半分」の意味が知りたかった。  
「磯部さん、半分って、どういうことなん？」

雄太は思い切って聞いてみた。磯部さんと呼ばれ、一しゅん、運転手さんはおどろいたようだったが、ちらりと「乗務員証」に目をやって、笑顔で話してくれた。

「嘉兵衛さんは確かに函館の恩人ですよ。でもね、もうひと方、大恩人がいるんですよ。」  
「兵庫の人？」

「そう、兵庫の高砂の人。」  
雄太は、「高砂は神戸から姫路に向かうと中にあるな」と思った。

「高砂生まれの、工楽松右衛門っていう方ですよ。」  
「クラク……？」

「もとは宮本さんという名前なんですけど、なんでもエトロフという島にぶ頭を築いた功績で、江戸幕府からもらった姓だそうですよ。工楽の『工』は工夫とか工作とかの『工』だから、いろいろアイデアを楽しみながら物をつくるっていうような意味でしょうよ。」

「へえ、おもしろい名前やな。その工楽さんが函館で何かしたんですか？」  
「そう水を向けると、磯部さんは、」

「ぼく、何年生？ 六年生か。えらいな、そういうことに興味をもつのは。中学生みたいだ。」  
と、函館山の展望台に向かう坂道を運転しながら話してくれた。

「ぼくが言うように、函館というタイトいてい高田屋嘉兵衛さんなんです。函館にも資料館があるし、有名ですよ。でもね、函館の港を実際につくったのは松右衛門さんなんです。嘉兵衛さんより年上で、嘉兵衛さんと同じように船に乗って商売をしていた人なんです。とにかく物づくりが得意だった。言ってみれば、函館の港は嘉兵衛さんが目をつけ、松右衛門さんがつくったってことだね。港がなければ、この町は栄えなかった。だからね、この港をつくった松右衛門さんにも、私たちは、足を向けられないんですよ。」

雄太は、だんだん見えてきた函館の港を窓の外にながめながら磯部さんの話を聞いた。  
「松右衛門さんはね、工事に必要な船や道具をその場で発明してしまう。松右衛門さんがかいた当時の道具や船の図面なんかを見てもらん。いやいや、江戸時代の人がこんな細かい図面をかいたのかってくらい精密だよ。細い筆にすみをつけてかいたんだね。じつに見事な図面だ。嘉兵衛さんは、そんな工楽さんの実力を見こんで函館の港づくりをお願いしたんでしょうね。そういう意味では、嘉兵衛さんもさすがなんですよ。」

「ぶぶん……。」  
雄太はうなずいたが、磯部さんに言われた「半分」にこだわった。「工楽さんはいいた人かもしれないけれど、それは仕事でたのまれてやっただけじゃないか」と思った。「函館の恩人な

んていうのは大げさだ、やっぱり一番の恩人は嘉兵衛さんじゃないか」と、少々の反発を感じていた。車は山の中腹まで登ってきているようだった。

「ぼく、あら巻サケって知ってる？」

磯部さんが急に話題を変えた。うなずく雄太に、

「あれもね、松右衛門さんのアイデアなんだ。廻船問屋をやっていてサケに目をつけた。それで北前船で北海道から兵庫まで運ぶのに保存がよくなければというんで、発案してしまう。すごい人だよ。」

確かに工楽さんは何から何まで発明してしまっただと雄太はちょっぴり感心した。

その様子が伝わったのか、磯部さんはにたりと笑って、こう言った。

「一番すごいのが、これなんだよ。松右衛門さんは船乗りになる修行をしていたから船のことはよく知っているし、廻船問屋として北前船に乗っていたから、船を操作するときの問題点がよくわかっている。何が必要で、何が大切かってことをね。工楽さんは帆に目をつけた。当時の船は、もちろんみんな帆を立てて進むんだけど、どうもその帆の素材が悪い。これは改良をしなければいかんって、ずいぶん研究した。それで、帆に使う布を発明したんだ。」

「えっ、帆に使う布？」

「そう。帆布といってね。これがまたすごい代物なんだ。それまで、帆はむしろや綿布を重ねたものだった。綿でつくるのは手間がかかって値段も高い。ところがぬれるとあやつりにくくなって、船の速度も落ちる。長い航海には向かない。そこで地元播州特産の木綿糸を使って厚くてじょうぶで安くできる帆布を発明した。これは雨にも風にも対応できて、何しろ長持ちするんだね。その帆布には『松右衛門帆』という名前がついたほどなんだ。」

「あら巻サケも船の帆も、すごいアイデアですね。きっと大金持ちになったんでしょ。」

反応を確かめるように、雄太は磯部さんの横顔を見て言った。まだ「半分」のことにこだわっていた。磯部さんはちらりと雄太を見て、ゆっくり話し始めた。

「そう思うよね。でもね、松右衛門さんが本当にえらいのは、その帆布ですよ。発明とか技術っていうのは、今のご時世も著作権とか実用新案権とかいって権利を独りじめしてね、自分一人でもつけるもんじゃありませんか。江戸時代もそうだった。秘伝とか何とかいって、だれにも作り方を教えないのが当たり前。ところがね、この松右衛門さんは、この帆は航海の安全に不可欠なものだと言って技術を独りじめしなかった。どうぞ、どなたでもご自由にお作りください。」

「えっ！」

雄太はおどろいた。そして感心した。さっき「大金持ち」なんて言ったことを、少し反省した。

磯部さんは大きく息を吸って、そして、話し続けた。

「世のため人のため』ってよく言うよね。でも、だれだって自分や身内が第一で、知らない人のことなんかおかまいなしってというのが世の中だ。江戸時代だって、そうだったでしょ。よ。ところが、松右衛門さんはちがうんだな。これで便利に安全に航海ができればそれでよし。そこがえらい。函館の港づくりにしあって、仕事だったろうけど、自分を支えてくれた北海道へ

の恩返しだったと思うんですよ。だからね、嘉兵衛さんとか、松右衛門さんみたいなふところ  
のでかくて深い人とかかわりをもてたことが、函館のほこりなんだよ……。さ、着きまし  
たよ。港がよく見えますよ。」

和奏子が、はしやぎながら車を降り、お母さんと雄太に手招きをした。

雄太も眼下に広がる、大きく入り組んだ函館の港を見た。

今から二百年以上も昔、ここをつくっていた工楽松右衛門さんのことを考えた。

「世のため、人のため、か……。」

磯部さんが言ったその言葉を、雄太はつぶやいてみた。

神戸で待ってるお父さんにこのことを話そうと思った。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

## 丹波市と丹波篠山市をつなぐ道 ― 田艇吉 ―

丹波市と丹波篠山市を航空写真で見ると、市の境が多くの山々で分けへだてられていることがわかる。昔、丹波地域の人々は、いくつかあったとうげ道を通って、行き来していた。その中でも鐘ヶ坂峠は、古くから京都や大阪から丹波地域を経て、但馬、丹後地方にぬける要所であった。しかし、とうげ道は長く、険しく急な山道だった。

鐘ヶ坂峠を丹波市側から通ると、金山の頂上近くに自然の岩でできた「鬼のかけ橋」という奇観を見ることができる。江戸時代の浮世絵師歌川広重は、この地を名所として紹介しているが、この作品からも鐘ヶ坂峠がいかに急峻であったか、うかがい知ることができる。

\* \* \*

一八七九(明治十二年)の暮れ、県議員になっていた田艇吉は、雪のとうげ道を歩いていた。「危ない！ どけっ、どけっ！」

雪の積もった急な坂をゆっくりすべっていく馬力があつた。坂を上りきれずすべり落ちてきているのだ。艇吉たち通行人はあわてて左右によけた。もう少し勢いがあつたら、よけきれない人もいただろう。

「このとうげでは毎年、冬に限らず多くの人が急で細い道から足をふみ外し谷に落ちて命を落とす……。」

丹波地域を結ぶ大変重要な道は、交通の難所だった。

この鐘ヶ坂峠を行き交う人は、時代が明治になってから一気に増加した。馬力もたくさん行き交う、ただでさえ難所のとうげだ。交通量の増加で、危険の度合いはいっそう増していった。

艇吉は、ずっと下へすべっていく馬力を見ながら、考えていた。

「なんとかこのとうげ道を、人も馬力も安全に行き来できるように整備できないものだろうか。こんなに危ない状態のままだったら、さらに多くの人が命を失い、結局このとうげは世の中から見捨てられてしまうにちがいない。水上も多紀も時代から取り残されてしまうのではないか。」

「これは、なんとかせなあかん……。」

艇吉は、そう思った。

一八八〇(明治十三)年の正月、艇吉は有志数名の寄り合いで水上と多紀の将来について語った。道路改修の話から話題が鐘ヶ坂峠におよんだ。その時、艇吉は思い切って自分の考えを述べた。すると、参加した者からはずい道をはろうという意見が出され、

「なんとかしよう。」

とみんなの考えがいつちした。一日でも早くと艇吉の胸はおどった。

その日から、協力者を増やす活動が始まった。

しかし、活動を始めた矢先のある寄り合いでは、

「あかん、あかん。あのとうげはどうにもならへんて。」

真っ先に否定的な意見がとんできた。危険なのは承知だが、そういうとうげなのだ、だれもが思っていた。艇吉のように、とうげを整備しようなどという発想は、まったくなかった。

「気をつけて通れば事故は防げるやろ。」

「そんな何べんも通るとうげやないさかいな……。」

艇吉は参加者の関心のなさにいきどおりながらも、それをこらえて語った。

「これからは、わしら村の者同士だけが行き交うことを考えとつたらあかん。よその者もこのとうげを通るようになる。新しい物や技術が、このとうげをこえてわしらのところへやって来るんや。ずい道を通せば、安心してとうげを通ることができるようになる。そうなれば、多くの人が利用して、わしらの村も栄えるやろ。」

参加者は艇吉の話をだまって聞いていたが、一人が思りよ深げに言った。

「あんたの言うことはわかる。立派な考えや。でもな、金はどうすんのや？ ずい道を通すとないと、いったい、どれだけの金がかかると思うとんのや？」

この反論に、さすがの艇吉もちんもくした。なんとと言っても難所の整備である。どれだけの費用がかかるのか見当もつかなかった。もちろん、その費用を集める当てもなかった。

「艇吉はん、しょうがないやんか。荷物を少のうして、まずは気をつけて行けば安全やろ。」

費用の話になって、場のふん囲気が一気に冷めていった。

艇吉も、その場はだまるしかなかった。

それでも艇吉は、自分たちがこのとうげ道をなんとかしないことには、子や孫の世代に申し訳が立たないように思えてならないのである。雪の日にすべり落ちていった馬力の光景が目にかぶ。このとうげの危険性と不便さをなんとかしなければという思いがいつそう強くなる。

このままでは新しい時代に、とうげだけでなく二つの村も世の中の発展から取り残されていってしまうのではないか、この地域がどんだんすたれていってしまうのではないか、そんな危機感をぬぐい去ることができなかったのである。

あの寄り合いから、ことあるごとに艇吉は、とうげの整備の必要性を村の人たちにうったえた。

「艇吉はんは、とうげの話しかしよらへん。」

と、村で評判になるほどである。

そんなある日、村の世話役が艇吉を訪ねてきた。

「あんたはとうげの整備を熱心に提案しておるが、あの道がようになって喜ぶのは運送の仕事をしとる者だけやないんか？」

世話役は探るように艇吉の目を見て言った。

「ははあ、そういうことだったんか……。」

この時、艇吉は村の人たちの誤解のありかをようやく理解した。

自分が運送業者のかたをもっていると思われていたのだ。

艇吉は、自分が考えていること、思っていることのすべてを世話役に話した。

聞き終わった世話役はこう言った。

「ほな艇吉はん、荷物を運ぶ者だけじゃのうて、村にも、わしらの子や孫にも役立つことなんやな？」

「そうや。あそこを通るたくさんの人が難じゆうするのを見ると、これはあかんと思うんや。そりや、運送を商売にしとる者も、楽になるかもしれん。そやけど、それはそれや。だれもが安全に楽にこせるようなとうげに、わしらの代で、なんとかせなあかんと思うんや。」

だまって艇吉の話を聞いていた世話役は、

「わかった。」

と、ポンとひざをたたいて出て行った。

その日を境に、村人の態度は一変した。

「馬力だけのためじゃないわ。」

「これからの時代に備えなあかんというこっちゃ。」

艇吉の考えがしだいに理解されてきた。

それからというもの、村の寄り合いが開かれるたびに、集まって来る村人の数はどんどん増えていった。

「問題は金やな。寄付をつのつたらどうや。わしが一番目になったる。」

と資金について語る者がいる。

「ずい道だけでなく、周辺の道路も改修すれば、みんなが喜ぶはずや。」

と、とうげの整備から計画を広げる考えへと発展した。

艇吉は、丹波地域の未来のために語り合うみな姿を、大きくうなずきながら見つめた。

\* \* \*

その後、計画は進み、多方面への要せいも実り、ばく大な資金は国と県に補助してもらうことになった。必要な資金の半分近くは、丹波地域をつなぐ道に期待を寄せた地元の人たちからの寄付によるものだった。

ずい道の工事は一八八〇（明治十三）年十二月に着工した。レンガ積み工法のトンネルで、これは日本最初の試みだった。使用したレンガは三十八万枚といわれる。

一八八三（明治十六）年、鐘ヶ坂峠ずい道しゅん工。十月十三日に、盛大な開通式が行われた。

式典に出席した艇吉に、さまざまな人が祝いを言いに来た。

しかし艇吉は、「それは筋がちがう」と思った。

「わしは、村に必要だと考えて言い出しただけや。あとはみんなの力で、こしらえたんや。」

そう思いながらも艇吉は、次の世代に残す仕事を一つやりとげたことに、満足していた。

艇吉は笑顔でずい道の入り口を見つめていた。しかしその表情は、まだまだ整備すべき交通もこの課題に思いをめぐらせているようでもあった。

## ともに支えあつて

「ドーン。」

一月十七日、午前五時四十六分、とつぜんの大きな大地のゆれに、人々はねむりからさまされた。

まだ夜の明けきらぬうち、人々はくずれ落ちた家から外へ出て、ゆくえのわからぬ家族の名をさげんだ。あまりのことに、人々はまだ様子ようがつかめなかった。せまりくるほのお、くずれた高速道路、かたむき、今にもたおれそうなビルの群れ、水道もガスも止まったまま。電気も使えない。

明るくなるにつれて、ひ害のとてもない大きさが、だれの目にもはっきりとわかってきた。死者五千五百人余り、そしてひ難者は三十万人。戦後最大級の阪神・淡路大しん災に、神戸のまちはおそわれたのである。

「あの学校ではいったい何をしているのだろう。」

「どんな人がいるのかな。」

地いきの人々は、そう思いながら校舎をぼんやりとながめるだけで、一度も足をふみ入れたことのない人がほとんどであった。ただ、自分たちとは国せきのちがう子どもたちが通っていることは知っていた。

その東神戸朝鮮初・中級学校に、今は約百人の日本人と約五十人の在日朝鮮人がいっしょにいる。共同のひ難生活だ。家を失って行き場のない人々に、

「校庭を自由に使ってください。」

と、学校がよびかけたのだった。

「今から、おにぎりときムチを配ります。」

その声の人々は集まってくる。

「わたしたちは日本人やけど、もろてもええのかな。」

「同じ人間やないですか。」

各地の在日朝鮮人から物資がとどく。それらの物資は、日本人、在日朝鮮人にかかわらず、同じように分けられた。

「つきあいがなかったのに、何十年来の友人のように助けてくれる。」  
と、日本人から感謝の声があがった。

地しん発生から数か月がたった。町もだんだんと復興してきた。人々の生活にも活気がよみがえってきた。やがて、日本人がこの学校の校庭から去る日も近いことだろう。しん災という悲しいできごとではあったが、それを、ともに助けあうことで乗り越えたこの校庭のできごととは、人々の心から消えることはないだろう。

また、ひ難所となった小学校や中学校などのいたるところで、多くの日本人が、さまざまな国せきの人々と、ともに支えあいながらひ難生活を送った。

## わが道を歩む ―池田草庵―

養父市八鹿に風格のある木造の建物があり、「青谿書院」とすみで書かれた看板が入り口にかかげられている。但馬聖人と呼ばれた池田草庵の私塾あとだ。

草庵が、三男として但馬国宿南村（現在の養父市）に生まれたのは一八一三（文化十）年。母を亡くして満福寺にあずけられたのは十才の時だった。そう明でまじめな性格が、修行への熱心な取り組みを支えた。その向学心の高さを見こんだ寺の和尚は、いずれ草庵を自分の後継い者にしよう決めていた。僧りよになることがこの時点での草庵の宿命だった。

草庵十八才の時のことである。ちょうどそのころ相馬九方という儒学者が但馬に来ていた。草庵は、九方先生のもとで漢文を学ぶように和尚にすすめられた。そこで熱心に学んだ草庵は、人間の生き方を考える儒学にみ力を感じ、その学問の世界に入りこんでいった。この時から草庵のなやみが始まった。

寒さの厳しい但馬の冬。まだ、夜も明けきららない満福寺の本堂で、草庵は一人ゆかを見がいていた。水に雑きんをひたすと、その冷たさに指先がしびれる。本堂の板間を心をこめ、丁寧にふきながら、ふと、手を休めて思いにふける草庵であった。

また、いつもの難題が頭の中をめぐりはじめた。  
「私は、どうしたらいいのだろうか……。」

思わずそんな言葉が口をついて出た。このまま和尚の期待にそって僧りよの道を歩むのか、自らの道を自分で決めて儒学の道へ入って行くのか。

そんな時、九方先生が京都へ去ることになってしまった。草庵は九方先生のもとで儒学を学び続けたという気持ちでどんどんふくらんでいった。

草庵は、思い切って和尚に儒学の道に進みたいと申し出た。だが、当然のことながら和尚は反対した。和尚の態度はおだやかではあったが、厳として許さないという意志が草庵に伝わった。草庵は、自分の生きる道に、大きな判断をせまられた。今日まで育ててくれた和尚への恩を思えば、これまで通り僧りよとしての道を日々努力しながら進むべきだろう。しかし、儒学の教えは自分の心に深く通じる。このことをおさえこんで生きていったら、きつと後かいするだろう。今は若い若いが年老いてから、自分の判断が誤っていたと気づいたとしても取り返しがつかない。

草庵のその思いは、日増しに強くなっていった。

しかし、和尚の許しが出ることは絶望的と言ってよかった。

「私は、儒学を学びたい、しかし……。」

暗い本堂にろうそくのほのおだけが細く小さく灯っている。ゆらゆらとたよりなくゆれる光は、草庵の今の心のゆれのようであった。

本堂の外が白み始めるまで、ろうそくのほのおを見つめる日が続いた。草庵は、自らの心のゆれに、もはや結論を出さなければならぬと感じていた。

しもの降りた寒い日の明け方のことだった。

「和尚様、お許しください。」

草庵は、閉ざされた寺の門に向かって深々と頭を下げた。かさのひもを結び直す草庵の口元はぎゅっと結ばれていた。何度もふり返ったあと、草庵は何かをふり切るかのように小走りにかげ出し、京都へ向かった。

京都で九方先生の塾生となった草庵は、苦勞をしながら儒学を学んだ。どんなに学問を続けることが苦しくても、満福寺を去ったという自らの決断を支えとして、草庵は学問にはげんだ。

しかし、草庵の心のおくには、

「私は、和尚様の許しを得ずに、だまって寺を去ってしまった。和尚様に対して、人として許されないことをしたままである」という思いがが続けた。

二年ぶりに但馬に帰郷した際、草庵は和尚にわびに行ったが、会ってはもらえなかった。

「和尚様が会ってくださらないのは、仕方のないことである。」

そうつぶやきながら、草庵は、人として和尚様に認められるようになることを自らにちかった。

さらに二年の歳月が過ぎ、再び満福寺の門をたたいた草庵を一目見た和尚は、門前に立つ草庵の姿から感じられる誠意ある人がらに感心し、ついにかれを許した。

「何も言わんでよい……。」

おだやかな笑顔で和尚に声をかけられた草庵のほおには、一筋のなみだが流れた。

草庵が京都に向かうことを決断したあの日から、四年の歳月が流れていた。

再び師弟として心を通じ合わせた二人は、和やかに語り合った。

「ありがとうございます。」

草庵は、寺を立ち去る時、もう一度寺の門をふり返って、深々と頭を下げた。

京都で学問を深めるうちに、草庵の評判は故郷の人々にも知られるようになった。地元の若者たちをぜひ導いてほしいという熱心な依頼に、草庵は但馬にもどった。

その後も草庵は、「慎独」という言葉に象ちようされる「自律」の心を大切にしながら、塾生をたぬきながら、私塾「青谿書院」を開き、全国から集まった多くの若者に教えを説いた。塾生からは、近代日本の政治や教育の発展に寄与した多くの人材をはい出した。

「但馬聖人」という呼び方には、学者としてだけではなく、草庵の生き方をもたたえる思いがこめられている。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複製して使用することを禁止します。

## 甘地の獅子舞

舞がどんどん進んでいき、次はいよいよ「早がわり」だ。

「がんばれ！二人とも、絶対成功させてよ……。」

ぼくは、まるで自分が舞っているような気持ちになって、ドキドキしながらいのった。

今、舞を演じている真也さん、裕樹さんは、同じ甘地地区でぼくといっしょに獅子舞の練習をしている高校生。二人は、ぼくにとって兄のような存在だ。

甘地地区では、今まで長い間演じられていなかった獅子舞の「早がわり」という伝来の技を復活させたいと、ここ数年話し合われてきた。あるけいこの日、祭り保存会の人たちは、失われつつある獅子舞の技を知っている後藤さんというお年寄りを姫路から招き、だれかに受けついでもらおうと話をしていたそうだ。たまたまそこへ、真也さんと裕樹さんが練習にやってきていた。話を聞いて、二人がちょう戦したいと名乗り出たという。そして、毎日毎日、時間をかけて「早がわり」の練習にはげんできたのだ。

ぼくは、初めてその練習を見た時、いったい何が始まったのかと思った。上に乗る真也さんと、土台になる裕樹さん。二人の一生けん命に取り組む姿にびっくりした。裕樹さんは、ぐつと歯を食いしばってバランスをとっている。そのかたの上では、真也さんがかた車の状態から立ち上がろうとしていた。ぼくなんか、かた車してもらっただけでも高くてこわいのに、かたの上に立つなんて考えられない。それなのに二人はこわいとも、しんどいとも言わない。ただ、もくもくと練習に打ちこんでいた。

「あの高さで獅子をかぶるとすごいだろうな。空で舞っているように見えるんじゃないか。きつと、今までにないはく力にちがいない。」

ぼくはそう思った。

ある日、練習が終わった時、ぼくは聞いてみた。

「なんで裕樹さんは、そんなに一生けん命やってるん。」

「そりゃ、技がすたれてしまうからや。」

裕樹さんは、そう言った。

「すたれてしまう？」

ぼくは思わず聞き返した。

「そうや、すたれさせたら、あかんからや。」

そして、裕樹さんは続けてこう言った。

「後藤さんは若いころこの村に住んでいてな、伝来の技を絶やさないように先ばいから教えてもらっていたらしい。厳しかったけれどすごく楽しかったんやと、その時のことをまるで若者のように話してくれた。その話を聞いているうちに、だれかがやらなあかんと思うようになったんや。」

今度は真也さんに聞いてみた。

「かたの上に立つのってこわくない？　ぐらぐらするやろ。」

「そりゃこわいわ。でも、裕樹君がしっかりバランスをとってくれると立ちやすいんや。それに、教えてくれている後藤さんたちも若いころやっとなんやし、ぼくらにできることはないやろ。」

真也さんはあせをふいた。

「でもな、練習して、前にできなかったことができるよ、うれしいで。だんだん技が完成していくのが、なんか楽しいんや。二人でどうすれば安定してできるのか考えてるんやで。それにな、今、ぼくらがこの技を覚えへんと、永遠にこの技は消えてしまう。だから、どうしてもできるようにならなあかんのや。」

真也さんは真けんと言った。

みんなが帰った後も、二人は、何度も何度も練習をくり返した。いつもはじょう談ばかり言い合っておもしろい二人なのに、「早がわり」の練習の時だけは、とてもじゃないけれど声をかけることができず、ぼくは、ただじっと見ているだけだった。

練習はくる日もくる日も続いた。かたの上で、おそろおそろ立って曲がっていた真也さんのこしが、練習を重ねるごとに、バランスをうまくとれるようになり、きれいにのびていく。

裕樹さんも、最初のうちは足がぐらぐらしていたのに、どっしりと立って支えることができるようになっていった。練習に打ちこむ二人は、とてもかっこよかった。

後藤さんも、村のおじいさんたちも、二人の練習の様子を真けんまなざしで見守っていた。

祭りでの舞は、クライマックスをむかえた。さあ、いよいよあの技が始まる。

ぼくはぐっと手に力をいれた。足にも力が入っている。心臓もバクバクしてきた。地域の人も、後藤さんもみんな一点を見つめていた。そして、次のしゅん間……。

ぼくたちは、空で舞う獅子を見た。

「すごい、すごい、すごい！」

大成りだった。みんな、大きなはく手を二人におくった。ぼくはガッツポーズをしていた。横にいた後藤さんが、

「よくあの技を復活させてくれた。伝統は、その時その時の熱意がないと、つながらへん。」とつぶやくのが、聞こえた。

ぼくは自分のことのように、二人のことがほこらしかった。

祭りが終わった。

舞終えた裕樹さんと真也さんは、いつもよりずっと立派に見えた。

「ぼくも、きつと……。」

ぼくは、心の中でつぶやいた。

## 忘れられない夏 ―嘉藤栄吉―

二〇〇三(平成十五)年、夏の全国高等学校野球選手権大会兵庫大会、開会式直後に行われた開幕戦、足あとのないきれいなマウンドに立っていたのは八十五才の嘉藤栄吉さんでした。真っ白なユニフォーム姿で、始球式に臨みました。大きくゆっくりとふりかぶり、ボールを投げこみました。

スタンドから大きな手がわき起こります。

今、マウンドに立っているのは「伝説の球児たち」の一人。

久しぶりにグラウンドの土をふんだ嘉藤さんも、きつと七十年前の、あの暑い夏の夕暮れの出來事を思い出していたにちがいありません。

一九三三(昭和八)年八月十九日。時刻は午後六時になろうとしていました。阪神甲子園球場では、第十九回全国中等学校優勝野球大会の準決勝が行われています。バックスクリーンの得点板は、つぎ板をしてかかげられた「0」が四十九個並んでいました。

先こうは兵庫県の明石中学校、後こうは愛知県の中京商業学校でした。午後一時に始まった試合は、もうすぐ五時間を経過しようとしていました。

まだそのころ、証明設備のなかった阪神甲子園球場は夕やみに包まれていました。グラウンドでプレーする選手から、観客席のたばこの明かりがホタルの光のように見えたといえます。

球場は異様な空気に包まれ、そして静まりかえっていました。

延長二十五回裏、中京商業のこうげきはノーアウト満塁。一点が入ればサヨナラという状況ようでした。明石中学校の中田投手は初回から投げ続け、すでにうでは感覚がなくなっているような状態でした。守備はバックホームに備えています。

九回裏にも同じようなピンチがありました。一死満塁、明石中学校応援席の人たちも負けを覚悟した場面、ピッチャーへのライナーでダブルプレーをとり、きゅう地をしのいでいます。延長戦、何度もチャンスをつぶしてきた明石中学校は二十五回裏の守りでエラーが重なり、このピンチを招いていました。セカンドの守備位置には、二年生ながらレギュラーにばってきされた嘉藤栄吉さんがいます。内野手は、中京商業三塁ランナーの前田選手をバックホームでアウトにするため前進守備です。嘉藤さんも二歩、三歩と前進しました。しかしどうしてか、ボールが自分のところに「こい！」という気持ちにはなれません。きんばくの状きょうの中で、いつもの「さあ、こい！」という自信が嘉藤さんから消え失せていました。

打者の中京商業大野木選手が中田投手の四球目を打ちました。ボールは大きくバウンドをしなから、一、二塁の間に転がってきます。

一塁の手の横内先ばいがゴロに反応しているのが見えました。

「これは……、一塁の手のボールか……」というわずかなためらいが、嘉藤さんの動きをにぶらせました。

それは、明らかに二るい手が処理すべきボールでした、

嘉藤さんはなんとかボールをグラブに収めました。が、中京商業の前田選手が三るいをスタートするタイミングを考えると、「間に合わないかもしれない……」という思いが脳裏をよぎりました。

嘉藤さんは、ボールをにぎり損ねたまま本るいへ返球しました。

観客のかん声と悲鳴が一しゅん、静まりました。タイミングはアウトに見えました。しかし、主しんのコールは「セーフ」。手を広げるポーズに球場は再び大きなどよめきに包まれました。明石中学校の福島ほ手の足が、ほ球の時ホームベースからわずかにはなれたのは、嘉藤さんからの返球が高かったからでした。無情にも鳴りひびく試合終りよのサイレン。嘉藤さんはグラウンドにひざからくずれ落ちました。

試合が終わり、かたを落としてベンチに引き上げた嘉藤さんは、

「すみませんでした。」

と、ナインに頭を下げました。自分のエラーで二十五回裏にサヨナラ負けをきってしまったのです。もちろん、だれも嘉藤さんを責める仲間はいません。しかし、嘉藤さんは自分で自分を強く責めていました。

「一生けん命やった結果やないか、仕方ない。だれも文句は言わん。」

高田かんとは、そう言いました。

それでも嘉藤さんは、頭を上げることができませんでした。

「おまえはバカモノか！」

さらに、嘉藤さんの頭に竹山部長のど声がひびきました。

「これは、みんなで一生けん命やった結果だ。人間が一生けん命に全うしたことをだれが責めるんだ！」

自分を責め続けている嘉藤さんを一かつしたのです。そして言いました。

「頭を上げる！ 胸を張れ！」

延長二十五回という歴史に残る名試合でした。だれもが両チームの選手たちをたたえました。日本中でラジオを聞いていた人たちも感動していたのです。

しかし、嘉藤さんだけは、「どのツラをさげて明石に帰ればいいんだ……」と、自分の返球ミスの責任を背負ったままでいました。

嘉藤さんはぼうしを深々とかぶり、ナインとともに明石駅に降り立ちました。

ブラスバンド部の演奏が聞こえ、明石中学校の選手たちは、地元の人々の鳴りやまなはいはく手にむかえられました。敗れたといつても、その戦いぶりにみな感動していたのです。先ばいたちは、その出むかえに感激しなみだを流していました。

しかし、嘉藤さんの目にあふれたなみだは、一人ちがう味がしました。かん声とはく手のうずの中を、一度も頭を上げることなくうつむいて通り過ぎました。嘉藤さんは明石の自宅にもどり、閉じこもりました。

「自分のエラーであの大勝負を終わらせてしまった……。」

試合終了のようなしゅん間が何度も胸中に再現され、そのたびに、あの時と同じようにひざがふるえました。

「あの時、自分のところにボールが飛んでこなければ……。」

「もう少ししーるい寄りに飛んでいてくれれば……。」

「もう少ししーるいベース寄りに守備位置をとっていれば……。」

そんなことばかり、家に閉じこもって三日間も考え続けていました。

四日目の朝、いつものようにため息をついた時、嘉藤さんの胸にある思いがうかびました。

「いや。あの最後のゴロがいちばん未熟な自分へ飛んできたのは、きつとぐう然ではない……。」

嘉藤さんはそう感じました。

「そうだ、こんなふうにしてにげてばかりではいけないということだ。もっと自分をみがけということだ。」

あの日の竹山部長の言葉が、また頭の上でひびきました。

「頭を上げろ！ 胸を張れ！」

嘉藤さんは立ち上がりました。自分にはまだ機会がある。もう一度仕切り直して努力すべきだ。

嘉藤さんは家を飛び出し、チームメイトが待つグラウンドに向かってかけ出しました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

## 樽見の大桜

この春、小学校を卒業していくぼくたちは、二メートルほどにのびた桜のなえ木をその大桜の周りに植樹することになりました。この大桜は、ぼくたちの町のシンボルなのです。

大桜の世話をしているぼくのおじいさんたちに手伝ってもらいながら、六年生全員で記念の若木を植えました。

あれは一年前、ぼくが六年生になった四月でした。

毎年四月、満開の「樽見の大桜」をおじいさんといっしょに見に行くのをぼくは楽しみにしています。

「樽見の大桜」は、ぼくの家の近くにありません。仙人の国にあるような気品に満ちた大桜ということで江戸時代には「仙桜」とも命名されたそうで、一九五一（昭和二十六）年に国の天然記念物に指定されました。

「そろそろ行こうか。もうだいぶさいと思うで。」

やわらかな日差しが暖かいある日、おじいさんとぼくは、樽見の大桜へと続く山道を登りました。

さきほこる桜を見ようと、たくさんの人が登って行きます。毎年、一万人の人がこの大桜を見に来るのです。

息をはずませながら歩いていくと、ぱっと視界が広がり、満開の大桜が姿を現しました。おじいさんとぼくは、毎年のことですが、その美しさに息をのみ、しばらくたたずんでいました。

「じいちゃん、あの大桜は千年も前からあるんでしょう。毎年、よくこんなに花をさかせるなあ。

自然の力ってすごいな。」

そう言うぼくに、おじいさんは、

「そうだな、自然の力は、確かにすごいなあ。でもなあ、あの桜は、実はたくさんの人に支えられて、ああしてきれいな花をさかせるんだぞ。」

と言いました。

「えっ、どういうこと。」

樽見の大桜に向かってゆっくり歩きながら、おじいさんは、話してくれました。

「わしが子供のころは、実はこんなにたくさん花はさいとれへんだったぞ。それどころか、だんだんとさく花は少なくなっただ。お前が生まれたころは、この木はもうかれていくんではないかといわれるくらい、花の数は少なくなっただ。いったんだぞ。」

初めて聞く話に、ぼくはおどろきました。

千年の間、ずっとこんなに見事な花をさかせ続けていたとばかり思っていたのです。

「この桜は町の自まんや。みんなほこりに思っどる。だからな、何とか木に元気を取りもどすことはできないかと考えたんや。しかし、どうすればいいかわからへん。ほんで役場に相談した

ら、樹木医の先生をしようかいしてくれただで。」

「樹木医？」

「木のお医者さんだな。その先生に、大桜をしん断してもらったんだ。そしたら、とても重しようだと言われた。人間でいうと重病人やな。幹の中が空どうになつとつて、木の重さで幹がさけとるといしん断やった。」

二人は、大桜の下までやってきました。幹の太さは直径六メートル程もあります。

確かに、よく見ると幹の中が空どうになっているのがわかります。

「そのままにしておくと、台風や大雪で枝が折れてしまう。そして、幹もさけてしまう。そこで、支柱をつくって支えたんや。そうすれば、枝や幹の重さが分散されるやろ。」

木の周りにジャングルのようなものがあるのは前から知っていましたが、これが枝や幹を支えているとは思いませんでした。

「支えはしたが、幹がかれかけとつたもんで、木が水を吸い上げることができれへんだ。これでは桜は生きていけれへん。樹木医の先生は、ずいぶん考えた。で、どうしたと思う？」

おじいさんはぼくに質問しました。でも、想像がつきません。

「ううん、難しいな。」

「そうやろ。わたちも、ずいぶんと考えたんだけど、わからへん。すると、先生が、『不定根を育てましょう』と提案されたんだ。」

「不定根？」

おじいさんはうなずいて、幹から出ている細い枝のようなものを指しました。

「これを不定根といってな、ここから水や養分を吸い上げるように工夫したんだ。」

長さは五メートルほどでしょうか、幹から何本も地面に下りるようにのびています。

「先生といっしょにこの根を育て始めたんだけどな、根は少しづつしかのびれへん。地面に根付くまではとても時間がかかる。夏にはかれないように、冬には雪で傷つかないように、一年を通してみんなで守りながら大事に育てたんだ。と中でかれました根もあって、みんな、もうあかんと思った。そんな時、先生から『ふつうの桜では、とっくにかれてしまっているはずなのに、この大桜は、もう千年も花をさかせ続けています。それは、この桜の木がもっている力と、この桜を愛していた人たちが、それぞれの時代で世話をし続けてきたからです。今度、私たちが、その思いをリレーする番です。そして、この立派な桜を、次の世代の人にも見てもらいましょう……。』とはげまされながら、みんなで協力して不定根をこの長さにまで育てたんだ。六年もかかったで。」

おじいさんは、静かに話してくれました。六年といえ、小学校入学から卒業までです。

「ほら、足元を見てみんせえ。」

おじいさんが指さす方を見ると、自分がさん橋の上に立っていることに気づきました。

「このさん橋の下の上には、とても細い根がたくさん走っているんだ。毎年一万人もの人が来てふんでいくと、土が固くなって根が水を通しにくくなり、死んでしまうんだ。」

おじいさんから話を聞く前は、ジャングリズムも、不定根も、さん橋も、あまり気になりませんでした。この時は、目の前の桜が、今までとはまったくちがうもののように見えました。

それから一年、植樹を終えたぼくたち六年生は、今植えた若い桜と、つぼみをたくさんもった大桜を、いつまでも見ていました。

ぼくは、一年前のあの日のおじいさんの話を思い出していました。

「木もっている自然の力と、それを守ろうという人々の思い……。」

大桜のたくさんをつぼみも、ぼくたちをじっと見ているように感じました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

## 龍馬がのこしたもの ―坂本龍馬―

美和子は、三年生のころから図書館で借りる本はたいいてい日本の歴史上の人物の伝記だった。織田信長はもう三回読んだ。徳川家康はそれほど好きではなかった。最近是新撰組の沖田総司がお気に入りだった。六年生になってからは、家にある父の歴史の本を読むようになっていた。

この夏休み、先生から社会科の宿題が出た。

「神戸に関係のある課題を見つけレポートをまとめてみましょう。どんなことでもいいから。」  
美和子は、真っ先に歴史上の人物をレポートしようと思った。しかし、意外と「その人」がうかんでこなかった。そんな時、長崎に住んでいるいとこの桃々のことを思い出した。桃々は、中学三年生だ。毎年、美和子が長崎へ行ったり桃々が神戸に来たり、順番に行き来していた。今年、桃々の番だ。美和子は桃々が好きだった。陸上部でスポーツ万能、勉強も熱心だった。「桃々みたいになりたい」と美和子はあこがれていた。

美和子は宿題のことを桃々に電話で話し、だれかい人がいないか相談した。

美和子は長崎に行った時、桃々にいろいろなところへ連れて行ってもらったことを思い出した。出島のあとが思ったよりせまいのおどろいた。大浦の天主堂でクリスマスを知った。原ばく資料館では平和の大切さを学んだ。長崎は歴史の宝庫だった。

「ねえ、坂本龍馬はどうかしら。」

と、電話の先で桃々が言った。

「坂本龍馬は私の好きな沖田総司の敵役よ。」

と、美和子と言うと、

「ははは、そうね、美和は沖田総司のファンだったね。でもね、龍馬もいいわよ。」

美和子は、「桃々は坂本龍馬が好きなんだな」と思った。そして、ちよつと不機げんに言った。

「だって、龍馬って、神戸と関係あらへんでしょ。」

「美和は知ってる？ 神戸の海軍操練所って。どこかに史せきがあるでしょ？」

「ううん、知らない。」

「じゃ、勝海舟は知ってるでしょ。」

「その人は知ってる。」

「神戸の海軍操練所はね、勝海舟っていう江戸の旗本が生みの親なの。海舟が神戸に海軍操練所をつくらうって言い出して、龍馬はそれに協力したの。だから絶対関係あるはずよ。」

「そうかな……。」

「来週、神戸に行くから、お姉ちゃんも調べとくよ。美和もちよつと調べてみな。」

桃々は、そう言って電話を切った。

「坂本龍馬か……。」

あまり乗り気ではない美和子だったが、桃々がせっかく言ってくれたのだし、とりあえず調べてみようと思った。

図書館で「勝海舟」と「坂本龍馬」の伝記を借りてきて、美和子は一気に読んだ。幕末の歴史は、大好きな沖田総司の生きた時代なのでくわしいつもりだったが、勝海舟や坂本龍馬の仕事は、やはり知らなかった。沖田総司は新撰組の一員として活やくしたが、この二人は明治維新にはなくてはならない存在だったということがわかった。美和子はお父さんに何か本を借りようと思った。

「まったく美和子は歴史好きだな」とお父さんは、感心というよりあきれながら何冊かの文庫本を持って来てくれた。「竜馬がゆく」という司馬遼太郎さんの本だった。

「美和子にはまだ難しいだろう。ちょっと関係がありそうなところを教えてあげよう。」  
そう言ってお父さんは、龍馬が勝海舟に初めて会った時のくだりを話してくれた。

「当時、江戸で北辰一刀流のけん術を修行していた龍馬は、その千葉道場のおんぞう司重太郎が『旗本のくせに開国を声高に唱える勝海舟はけしからん、暗殺に行く。』と言うのに、ひよこひよこついで行っただ。海舟の屋しきに暗殺に行つて座しきに通された二人に海舟が『あれをござらんよ。』と言つて地球ぎを見せる。海舟には数年前に咸臨丸でサンフランシスコへ行つた経験があつたんだ。『あの青いのが海だ。』と海舟は言い、『世界のほとんどが海だ。だから海を何とかしなくちゃいけない。』と言う。『イギリスのように海を家にするぐらいじゃなければいけない。』と二人をさとしたんだ。そして、『坂本君。』と言つて自身の日本はん栄論をひろうした。なるほどと感心する龍馬とは逆に、重太郎はいよいよ海舟の開国思想にいかり出し、わき差しをぬこうとした。その時、龍馬はパタツとたたみに平ふくし、『勝先生、わしを弟子にして仕あされ。』とこん願したんだ。」

おもしろかった。龍馬は、暗殺しに行つた相手に、弟子にしてくださいとたのむのだ。

「ねえ、ねえ、それで、どうなるの？」

「海舟は軍かん奉行になつて神戸に海軍の操練所をつくることを幕府に進言した。それが許されると、龍馬たちをつかつてその準備をさせる。それで龍馬も何度もこの神戸に来たんだらうな。操練所の最初のぼ集では二百名近い人が集まつたそうだよ。その中には、後の外務大臣になつた陸奥宗光もいたんだ。」

「じゃ、何か神戸で起こつた有名な出来事かなんか、ないのかな。」

「そうやな、龍馬は長いこと神戸におつたやろうけど、長崎や京都みたいに有名な出来事や事件があつたわけやないからな。」

美和子はがっかりした。

その夜、美和子は図書館で借りてきた龍馬の本を読み返した。そこに、「この国を洗たくしてみせる」という龍馬の言葉を見つけた。美和子は、その言葉に興味をもつた。

勝海舟にえいきようを受けて、龍馬は次第に世界に目を向けるようになる。日本が国として貝のようにからを閉じていたのでは、どんどん進んでいく世界に取り残されてしまうという思いが、龍馬の心の中でつものっていくのがよくわかつた。そして美和子はふと思つた。

「そういう龍馬の熱い思いは、きっとこの神戸でふくらんでいったにちがいない。」

美和子は明かりを消してねむりについた。夢に総司と龍馬が出て来た。

桃々が神戸にやってきた。去年は美和子が長崎に行っているから、二年ぶりだ。

「やっぱり神戸は都会だね。長崎よりよっぽど大きいわ。」

そう言いながら桃々は美和子の部屋に荷物を置いた。

「今年は受験勉強があるから、神戸に居るのは三日間だけだね。」

そう言って笑う桃々に、美和子は、

「来た早々で悪いけど……。」

と、例の龍馬の話をした。桃々はだまって美和子の話を聞いていた。そして、言った。

「美和、さすがだね。よく調べたね。総司か龍馬かなやnderのが、またいいね。私もね、調べたのよ。これは使えるわよ。龍馬と神戸。」

桃々は、長崎で調べたことを話してくれた。受験勉強でいそがしいのに、こんなことをさせて申し訳ないと思いつつ、美和子はそれを聞いた。

「龍馬の活やくはね、土佐や長崎、そして京都、江戸がおなじみだけど、神戸海軍操練所の設立とその塾頭として、神戸とも相当深いかかわりがあるのよ。この時期、勝海舟から世界のことや外国のこと、海のことや船のことを学んでいくうちに、龍馬の心に日本という国の将来に対する危機感のようなものがわき上がってきたんじゃないかしら。龍馬の国を愛する思いが次第に強まっていったのは、神戸にいた時にちがいないわ。勝海舟がわずか一年ほどで軍かん奉行を辞めさせられて、龍馬も神戸を去ってしまうんだけど、そのあと長崎や京都でやったことは、この時芽生えた『日本をなんとかしなきゃ』っていう思いからだと思うのよ。だから神戸は、日本を変えようとした龍馬の考え方が、生まれて育ったところと言えるんじゃないかな。」

「そうか」と美和子は思った。沖田総司もかっこいいが、知れば知るほど、龍馬が日本という国を愛し、新しい日本を夢見ていたということがわかる。

いつの間にか夏休みのレポートのことよりも、龍馬の生き方に美和子はひかれていった。そんな美和子に桃々が言った。

「じゃあね、美和、今度は私が質問するね。」

「えっ、なに、急に……。」

「もしもよ、龍馬が今の美和たちと出会ったら、何て言うかしら。」

「そんな……、わかるわけじゃないじゃない。」

桃々は、美和子の顔をのぞきこんだ。そして、

「じゃ、ヒントをあげるから想像してごらん。龍馬は神戸海軍操練所で、多くの仲間と新しい日本を夢見て、熱く議論をして過ごしたはずよ。」

「それは、そうだろうけど……。」

「龍馬は生きて明治維新をむかえることはなかったけれど、龍馬から強いえいきょうを受けて、同じ志をもっていた陸奥宗光が、新しい国づくりの中で第四代兵庫県知事となって神戸にもどってくるのよ。」

「えっ!」

「宗光が知事になって、龍馬と共に過ごした神戸の地に立って、どんなことを考えたんだろうね。」

龍馬の同志が兵庫の県知事となったことにも美和子はおどろいたが、それ以上に、「龍馬の思いが多くの人に受けつがれて今があるんだ」と強く思った。そして、

「どんなことを考えていたんだろう……。」

という桃々の言葉を、小さな声で言ってみた。

「桃々姉ちゃん、なんだか、わかるような気がする。龍馬さんが夢見た日本の国に向かっていくかどうか、龍馬さんが、優しく私たちに問いかけてくるような気がする。」

「龍馬さん」と呼んだ自分に美和子は、はっとした。

「桃々姉ちゃん、これはきつと、龍馬さんからの宿題だね。」

美和子と桃々は顔を見合わせて、笑った。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。